
喋る犬と宇宙外交官

メロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喋る犬と宇宙外交官

【Nコード】

N3008T

【作者名】

メロ

【あらすじ】

自分のブログや、他の掲示板に投稿したものです。

喋る犬と少年が宇宙外交官となって地球を守るファンタジー。

オープニング

僕は、眠い目をこしこすりながら、のそのそとベッドから起き上がった。ベッドの横にある、窓のカーテンを開けると、太陽の明るい日差しが部屋全体に差し込んで、僕の顔を照らし出した。

んー、いい朝だ。この前まではこんな感じで朝が始まる。この前まではね。僕が大きなあくびをすると、後ろから、若い男の声がした。

「やあ、おはよう。今日もいい天気だね。まあ、外に出て話でもしようよ」

僕は後ろを振り向かない。奴の考えている事はだいたい分かっている。

「お前、散歩に行きたいだけだろ」

もう一度、大きなあくびをして言った。返事はない。でも、ぴよんぴよん跳ねて、絨毯に足が叩き付ける音と、へっへっへ、という息づかいが聞こえる。八月からずっとこうだ。奴が言いたい事は分かっている。へへへ、当たりさ。

みんなは、『不思議な出来事』というものに出会った事があるだろうか。UFOに遭遇したとか、人が中に浮くだとか。いろいろあると思う。人によつては、えっ？こんな事！と思う事が不思議に思う事があるかもしれない。僕は以前、偉そうにこう言う奴に出会った。

「世の中の当たり前の事に、不思議な出来事なんて格付けをするからややこしくなるんだよ。UFOが来るのも、人が宙に浮くのも、世の中の自然な流れの一つ。そう考えれば今、学者や世間の人々が一生懸命悩んでいる事が、すんなり解決できるだろうが。だろ？」

こう言った奴の姿を見ながら、ふんふんと頷いた。そして、奴を指差して言った。

「お前も、その流れのうちの一つなのか？」さらに、奴を抱き上げて言った。「今言った事を鏡の前に立って、言ってみよ。そうすれば、お前の言った事が、真実かどうか分かるぜ」

僕は奴を降ろしてやると、奴は何のこっちゃ、と笑い飛ばした。

僕は大きなため息をついた。こんな奴と一ヶ月も一緒に暮らすのか……。はははと笑う奴の横で僕は、はははと笑いながら涙目になった。これから先が思いやられる。

紹介が遅れました。僕は空野天馬と言います。何かパターンのような、そうでないような名前だけど……。それと、奴の紹介はまた後におこう。みんなきつと驚くだろうからさ。

ああ、そうだ。忘れてた。ちなみに、僕が出会った『不思議な出来事』は、『喋る犬と出会った』さ。

オープニング（後書き）

読んでいただいております。
徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

喋る犬？

当たり前の事を不思議がって、首を傾げる人間の姿は実に妙である、と言いつ張る奴の言う不思議論を述べる。

『不思議』とは、未だかつて、人間が経験した事がなく、なおかつ自分たちが理解できない事である。

奴はそういつて、べらべらと喋りだした。

だいたい、人間は自分が一番偉いと思ってるから、いけないんだ。自分が喋れるから偉い？そんなのくそくらえだ。世の中の当たり前前の事に、不思議なんて格付けするからややこしくなるんだよ。UFOが来るのも、人が宙に浮くのも、世の中の自然な流れの一つ。そう考えれば今、学者や世間の人々が一生懸命悩んでいる事が、そんなに解決できるだろうが。だろ。

奴は言ってる事とやってる事がめちゃくちゃだ。奴は分かかってない。

僕はまだ受け入れる事ができない。奴の不思議論じゃない。目の前で起きている『不思議』な事が認める事ができない。最も、奴は自分が一番不思議だなんて思っても見ないだろうけどね。

一年前の七月三十一日の、ちょうどこんな日だった。雨が激しく地面に打ち付ける。僕は学習塾の帰り、人通りの少ない住宅街を傘をさして歩いていった。家まで、あと四百メートルぐらいというところで、僕はあるものを見つけた。そうたいそうな物じゃない。薄暗い路地に、明るく光る電灯の下。白く霧みたいにもやが出てたけど、遠くじゃないからすぐに分かった。

その電灯の下には、小さなダンボール箱が置いてあった。

僕は、そのダンボールに近づくと、中身を見るために上からのぞ

いた。ダンボール箱の中身は犬だった。犬種は、ミニチュア・シユナウザーだと思う。かわいそうに、子犬は冷たい雨に打たれて、びしょびしょになって震えながら、クーンクーンと泣いていた。どうすればいいんだろうか。

僕は、カバンから何故か持ち帰ってしまった折り畳み傘を開いて、子犬が濡れないように立てかけた。そして、タオルを取り出し、子犬の体を拭いてやった。子犬を拭いたタオルは、ダンボール箱の隅にたたんでおいて、カバンから新しいタオルを取り出し、広げて子犬の体にそっとかけた。

「これでいいな」

僕は勝手に納得して、子犬の頭を撫でてやった。僕は、犬は嫌いじゃない。というか、好きな方だ。

子犬を見つめると、子犬が僕の方を見て「ありがとう」とでも言うように、にっこりと笑ったような気がした。僕は、なんだか恥ずかしくて、「風邪引くなよ」と言っただけで家に向かって歩き出した。子犬が見えなくなった後、明日、傘とタオルをとりこいこうと思いつつ、僕は走り出した。

次の日。天気予報通り、晴れになった。二階の窓から外をのぞくと、地面は乾いていた。僕は着替えて、すぐさま外に飛び出した。そして、真つすぐに昨日の子犬のところへ走っていった。

だが、そこにはダンボール箱は無く、代わりに、きちんとたたまれたタオルが二枚と、折り畳んで袋に綺麗にしまつてある折り畳み傘が置いてあった。

「なんだよ」

僕は思わず呟いた。僕は、傘とタオルを手にとると、タオルの間から、紙が一枚ひらひらと落ちた。

その紙を拾い上げると、僕は四つ折りになっている紙を広げた。その紙にはたった一言しか書いてなかった。『ありがとう』これだけだった。誰かが飼う事にしたのかなあ。僕は首を傾げた。でも、

いいや。よかったな。子犬の顔を思い出しながら、心の中で呟いた。

僕は、一年前のそんな事を思い出しながら、窓辺で大きくため息をついた。今日も、あの日と同じような雨がザーザーと降り続いていた。宿題も終わってしまっただし、なんもやる事無いから暇だな。僕は、そう思いながら玄関に向かっていった。

靴を履くと、傘を傘立てから取り出し、玄関のドアを開けた。行き先は、あの子犬がいたところだ。別に深く考えていた訳じゃない。一年前の事を思い出していたら、体が勝手に動いただけだ。僕は自分にそう言い聞かせた。そういうふうに、納得したかっただけなのかもしれない。

早歩きで、目的地に向かう。雨の降り方が一層激しくなってきた。僕は傘をしっかりと握りしめた。一年前、子犬がいたところには何もなかった。いや、よく目をこらしてみると、小さなビニール袋が落ちていた。

僕はビニール袋を拾い上げた。ビニール袋の中には何か固い物が入っていた。僕はそれを取り出した。それは、小さなメモ用紙だった。一年前の、あのときのように四つ折りになっていた。僕は紙を広げた。そこには『そっちに行くよ』と書いてあった。僕は思わず、へ？と間抜けな声を上げた。

結局なんにもなかったな……。帰り道、僕は心の中で呟いた。何で、あんなところにいったんだろうか。あんな紙切れ意味なんかないじゃないか。僕はすっかり落ち込んでしまった。でも、早歩きで家へ戻る。家の前についたとき、僕は思わず声を上げた。

「あ！」玄関の前に一匹の犬が座っていた。犬種はミニチュア・シユナウザー。あの時の子犬と同じ犬だ。

「お前……あの時の……」

なかなか言葉が出なかった。僕は大きく深呼吸を言った。

「お前、あのときの子犬か？」

すると、その犬が微笑んだように見えた。

「その通り。でも、？子犬？じゃないんだな」

へ？僕は周りを見渡した。周りには誰もいない。じゃあ、どこから声が聞こえたんだらうか？

「ここだよ、ここ。君の目の前さ」見ると、犬が口をぱくぱくさせていた。そこから若い男の声が聞こえる。「これから一か月間、お世話になるからね。よろしく」

信じられないかもしれないけど、僕は『喋る犬』に出会った。

喋る犬？（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

喋る犬？

八月一日の朝になった。毎日、六時に起きるのを習慣にしている。ベットからのそのそと起き上がると、ベットの横のカーテンを開けた。明るい太陽の日差しが、体中にあたる。実に気持ちがいい。両手を大きく上に上げ、大きくあくびをすると、後ろから声が出た。「おはよう。実に気持ちがいい朝だね。早いから散歩にでも行こうよ」

若い男の声だった。

ああ、そうだった。奴を飼う用具は僕のこずかいで飼わされた。家につれて入ると、さんざん母さんには怒られるし、父さんには自分のこずかいで用具は揃えろと言われるし。もう、最悪の一日になった。

それに、こいつは喋るからなんて言えないし……。とにかく奴には、父さんや母さんが一緒にいるときは、人間の言葉を喋らないようにと忠告しておいた。

こいつ、とにかくうるさい。人間の言葉を喋れるのをいい事に、常におやつや餌、散歩を要求してくる。それに、少し偉そうなどころがある。僕がいたおかげで一年前お前は助かったんだ。って、思いつきり言っただけ。そんな事を考えてる僕をよそに、奴はぴよんぴよん跳ね回ってる。

「ねえ。行こうよ。行こうよ」

奴はさらに飛び回る。そして、転んだ。

「ねえ、早く」

「分かっているよ。いいか？覚えておけ。お前は僕に連れて行ってもらうんだぞ。それに、お前は一年前、僕が助けてなかったら、今頃どうなっていた事か」

「そんな事どうでも良いからさ。早く連れて行ってよ」僕の言葉は

奴のうるさい言葉によって、遮られた。「ねえ、天馬。早く連れて行ってよ。早くしないと、朝ご飯になっちゃうよ」

僕は分かった、分かったと、ベッドの横の出窓に置いてある、首輪とリードを奴につけた。そして、僕は、不思議な事に気がついた。「どうして、お前は僕の名前を知ってるんだ？それに、お前の名前を聞いてなかったぞ？」

すると奴は、そうだったけ？と小首を傾げた。「そんな事いちいち説明しなきゃいけないのか？」

僕がうんうんと頷くと奴は、はあ、とため息をついた。少しむかつく奴だ。

「俺はコルーパだ。言わなかったっけ？それに、何で君の名前を知ってるかなんて、いちいち言うもんじゃないだろう？君のお母さんやお父さんが呼んでたじゃないか。だろ？」

確かにそうだった。奴　コルーパの言う通りだった。

「じゃあ、散歩に出かけようか」
気を取り直して、僕は言った。僕はそれで、コルーパの機嫌が良くなると思っただが違った。コルーパはフンと鼻を鳴らし、部屋を出て階段へ向かった。あーあ、怒らしちゃったかな？

玄関に向かうと、コルーパは僕の靴の前でおすわりをして待っていた。僕が靴を履くと、立ち上がった。僕がリードを持って、「さあ、行くか」と言うと、コルーパはワンと鳴いた。　なかなかの演技だな。台所にはお母さんがいて、今まさに朝食を作っているところだった。コルーパが鳴いたのが分かったのか、台所から、ひよいと顔を出して「いつてらっしゃい」と言った。

玄関を出ると、コルーパは一年前に僕たちが出会った場所へ引張っていった。あの辺は人通りが少ないし、近くにも公園がある。コルーパは、そこで人間の言葉で何か話をするのだろう。だんだん人通りが少なくなってきた。しばらくすると、コルーパは僕の真横について、僕の顔を見上げた。

「この近くに公園があったはずだな。そこで話そう。誰かに聞かれ

ると厄介な事になるしな」

コルーパはきよるきよると周りを見た。

「あ、それと、しばしの間は君が疑問に思っている事には答える事はできない。だが、答えられる範囲なら答えてやる」

僕とコルーパは公園に入ると、ベンチに腰掛けた。コルーパは、ベンチの下の影に寝転んでいた。僕は呼吸が整ってきたのでコルーパに聞いた。

「じゃあ、聞くけど、お前は何で人間の言葉が喋れるんだ？どう考えたっておかしいだろう？犬が人間の言葉を喋れるなんて。どうだ？この質問には答えられるか？」

コルーパは静かに首を横に振った。

「その質問については答えられない。悪いな。時が来たら話すよ。もうしばらくは、我慢してくれ。話さないと行けない事は山ほどあるんだ」

僕は気を取り直して、次の質問に移る事にした。「じゃあ、お前は どうして僕の家に来たんだ？何の目的があつてきた？一年前に世話になったから……。それは、単なる口実だろう？本当の狙いは何なんだ？」

「それも、話す事はできないんだ。明日になったら話してやる。それでいいかい？」

僕は、しぶしぶ頷くと、コルーパと一緒に家へ戻った。

家に入ると、朝食のいいにおいが玄関まで漂ってきた。コルーパは舌を出して、へっへっへと言っている。犬にとつても、いいにおいなんだろう。コルーパは僕がリードをとつてやると、真っ先にキツチンに向かった。僕も、コルーパが蹴散らしていった靴と僕の靴を綺麗に揃えてキツチンに向かった。

食卓にサラダやパン、ウインナー等がのっている。僕は椅子に座ると、手を合わせ、コルーパに取られないようにと、抱え込むようにして食べた。

余談だが、現に僕はコルーパに夕食のトンカツを二切れ持つていかれてしまった。その際、奴は僕の部屋まで持ち込んでから食う。その素早さと言ったら天下一品だ。ちなみに世界最速の動物は……いや、これ以上言つと、別の話になってしまう。

僕が抱え込むようにして食べていても、コルーパは僕の朝食を狙っていた。だけど、隙がないためか奴はあきらめて、クーンと鳴いた後、僕の足下にふせをして寝転がった。そういえば、コルーパについて重大な事を忘れていた。

「母さん。僕、こいつの名前を決めたよ」僕が言つと、母さんは、まあと言つて続きを待った。「コルーパって言つんだ。ゲームのキャラクターの名前だったと思う」

まさか、この犬が勝手に喋つて、自分の名前を名乗ったからなんて言えるはずが無い。僕は、ごちそうさまをして、二階に上がった。僕の部屋は二階の廊下の一番奥だ。僕が部屋に入ると、コルーパは既に部屋の中央で座りをして待っていた。ご飯が欲しいと訴えているのだ。

「今、やってあげるからな。もう少し待っている」そういうと、僕はリードを出窓のところのかごに放り投げ、その中から青色の袋のドッグフードと皿を取り出した。「どれくらい食べる？」

僕はコルーパに聞いた。

聞かなくても返事は分かっているんだけど、念のために僕は一応聞いておく。すると、コルーパは「昨日と同じく、超大盛り！」と、ものすごく嬉しそうに言うのだ。ここで、コルーパについて分かった事を述べよう。たった一日だが、僕的にはかなりの収穫だったと思う。

さてと　こいつ、とにかく食いしん坊だ。食い意地だけがとりえと言つても過言ではないだろう。人間の物から、ドッグフードまで、ありとあらゆる物を口にする。そして問題は、この犬が喋ると言う事だ。僕だって信じがたい。でも、こいつは本当に喋っている。それに、喋れる事をいい事に僕と二人きりのときは、いつまでも喋

り続ける。それが、かなりうるさい。

気づけば、コルーパはもうドッグフードを食べ終えていて、ペロりと舌なめずりをしていた。

「ドッグフードだけじゃ、何か物足りないな」すると、コルーパはにやりと笑った。のだろう。「下から何か持ってきてくれな
いかな」

「何かって？」僕は語調を強めた。

「そうだなあ」コルーパは僕の目をしっかりと見据えている。「強いて言うなら……。たこさんウインナーがいいな。数は三個ぐらいで、横にケチャップとマスタードを添えておいて。で、後は」
「贅沢言うな！お前は犬だろうが！」

僕はつつい声荒げてしまった。そして、僕は部屋のドアをぱたんと閉め、足音を立てながら、階段を下りていった。そして、キッチンに向かい、たこさんウインナーを三本焼いて、横にはしつかりケチャップとマスタードを添えておいた。

「あー、おいしかった。ありがとう。でも、まさか本当に持ってきてくれるとは、思っても見なかったよ」コルーパは、肩をすくめたように見えた。

僕は、部屋の中央を陣取っているコルーパの目の前であぐらをかいて、コルーパがたこさんウインナーを食べるのを見ていた。

「おい、コルーパ。お前は人間の物をそんなにばくばく食べてもいいのか？どう考えても、だめだろう？」

僕がそう言うと、

「ああ、いいんじゃない？だって、食べても何ら支障がないんだし。だってほら、俺はこの通り喋れる犬なんだしさ。おいしいからいいんじゃないか？」

僕はあきれていた。「そんなんでいいのか？」ついでに、大きなため息をついてやった。でも、コルーパは別に気にする様子でもなく、ごろんと寝転がっていた。全くのんきな奴だ。

すると、突然コルーパは目をパチリと開けた。

「第一、俺はドッグフードがいまいち好きになれない。そんなもんだから、人間の食べ物を食べた方がいいのさ。もちろん、ドッグフードも食べるけれど」コルーパはサツと立ち上がり続けた。「つまり、俺は好きな物を好きなだけ食べるんだ」

僕は少しだけ納得したけど、現実はそううまく行かないと思うぞ。僕がこんな事を考えているとも思わずに、奴はまた寝転んだ。そして、ぼそぼそと呟いた。

「君には、たくさんの仕事がある」

僕は聞き取る事ができなかった。

喋る犬？（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

喋る犬？

次の日、僕は朝のお散歩を終え、朝食も食べ、ちよつとした休息を楽しんでいるところだった。僕は食卓の上につつ伏せになって、少しばかり怒っていた。麦茶の入っているグラスをはじいてみる。ピンと涼しい音がした。

でも、僕の心はとてもムカムカしていた。外が暑いからじゃない。コルーパのせいだ。あー、思い出すだけでむかついてくる。僕は汗ばんだグラスを掴み、ごくりと麦茶を飲んだ。冷たいのが喉からお腹の方へ通っていくのが分かる。朝の事だ。

コルーパは昨日と同じように散歩を要求し、僕とコルーパは昨日と同じように散歩に出かけた。公園に着き、やっと喋り始めた。奴は最初に夏休みの宿題の事を話題にした。僕が、そんなのは七月中に終わってしまったと言うと、奴はちつと舌打ちしたのを覚えている。そういえば、犬って舌打ちできるのか？

とにかく、僕は気にも留めなかったのだが、その後、奴は期末テストの事を話題にした。結果はどうだった？と聞かれて、僕は学年で二十五位だったと答えた。そのときから、奴が少しうるたえているのが僕には分かった。

何か隠しているな、と僕は思い、「何か隠している事は無いか？」と訊ねた。奴はすました顔で、別に無いよと答えたが、表情が微妙に変わった。僕は、ふうんと返したが、そのときに唐突に思い出した。昨日、奴は僕のところに来た理由を教えると言った。そのことを奴に言う、「何の事かな？」ととぼけて僕を家まで引つ張ってきた。

家に帰って、朝食の前に僕の部屋で「とぼけるな」と怒りを込めた声で言う、「そんな事言った覚えは無い」とあくまでも強気だった。奴がどうして来たのかが分からないと、なかなか落ち着かない。さつがに、朝食のときに下には来なかったが、二階に行くとや

はり、お腹をすかして待つていた。まったく、のんきな奴だ。

さて。どうしたものか。

気づいたらもう、十二時半だった。そろそろ、お昼時だな。今日一日中、ああやってとぼける気なのだろうか。そう思うと、余計にムカムカしてくる。僕は両手を握りしめ、ドンと机を叩いた。別に、質問は他にもたくさんする事ができる。あの、質問だけにとだわらなくてもいい。変な事をして、質問を全く受け付けられないようになってはかえって大損だ。ここは辛抱する事にしよう。

僕は階段を上って、自分の部屋へ。ドアを開けると、犬が一匹ちょこんと部屋の中央に座っていた。まるで、僕が今まさにここに来る事が分かっていたかのように。コルーパはニツと笑い、「別の質問をしに来たんだな。ちゃんと、分かっていたぞ」と言った。

僕は、ああ、そうだと言い、コルーパの前にあぐらをかいて座った。「あの質問は、もうしない。だから……聞いていいか？」コルーパは頷いた。

「お前はどこから来た？」僕は返事を待つたが、コルーパはなかなか答ええない。答えられないのだろうか？「これも、だめなのか？」

どれくらい時間が立つたのだろうか。それでも、コルーパはまだ答ええない。核心を突いてしまったのだろうか。窓辺にかけてある風鈴がちりんと鳴ったとき、僕ははっとした。奴はさつきから、喋る事も無ければ、動きもしない。鼻の前に手を当てても、息もしている気配はない。どうしたんだろう？窓辺の風鈴を見ても、斜めに傾いたまま、動かない。「えっ？」

僕は思わず声を上げた。窓のところに駆け寄ると、下の方を覗いてみた。サラリーマン風の男が足をあげたまま動かない。まるで、さっきの風鈴が引き金に鳴ったかのように時が止まってしまったようだ。

僕は階段を転げ落ちるように駆け下りて、キッチンを覗いた。そこにはお母さんがいた。ふう、とほっとすると、どこか様子がおか

しかつた。お母さんが昼食のチャーハンを作っている。別にそんなに不思議な光景じゃない。僕はお母さんをよく見てみる。何でおかしいと思っただのか、今分かった。チャーハンが空中で止まっている。お母さんにもこやかな表情で固まっている。僕はその場に崩れるように座り込んだ。??何てこつた。お母さんまでもが固まってしまった。

しばらくして、僕は二階によるよると上がっていった。部屋のドアを開けると、さっきまでそこにいたはずのコーパの姿が無かった。一体コーパはどこへ行ってしまったんだ……。深いため息とともに僕は心の中で呟いた。泣きたいのを堪えながら、窓から外をのぞいて見る。何の音もしない。風も吹かない。それはとても異様な光景だった。ふと、下を覗くと、何かシャツ！と言う音を立ててサラリーマン風の男のそばを横切った。何だ？

僕は急いでサラリーマン風の男のところへ駆けていく。でも、ここには何も動く物はなかった。僕は警戒しながら公園の方へ歩いていく。どうせ、家にいたって、何もする事が無いんだ。外に出た方が気が楽になるかもしれない。

公園に着くと、小さな子供達がブランコに乗って元気に遊んでいた。小学校一年生ぐらいだろうか。でも、その子達も固まっていた。前歯の抜けた口を大きく開き、ニカツと笑っている。普段なら微笑ましい光景なのだが、その状態のまま固まっているとなると、思わず目を背けたくなる。

ベンチに座って、固まった小さな子供達を見ると、急に吐き気がこみ上げて来た。僕はなんとか堪えたが、気づけば、堪えようの無い嗚咽がこみ上げて来た。どうやら、僕は泣いてしまったようだ。涙が止まらない。この世界で今動いているのは、僕だけじゃないかと思うと心底不安になる。

一時間ぐらい泣いていたのだろうか。大の男が情けないと思いつつも、誰も見ていないんだと思うと、男のプライドはどこかへ飛んで行ってしまった。泣き止んで、顔を上げて、周りの光景は変わ

りなかった。もう帰ろうと思いい、立ち上がると、どこからか子供の笑い声が聞こえてくる。驚いて、さつと後ろを振り向いてみると、何かシャツ！という音を立てて、公園の前を横切った。僕は慌ててその『何か』の後を追った。

『何か』は僕とコルーパが出会った。場所に立っていた。子供のようだ。全身白い服で身を包み、僕に背を向けている。僕はその子に近づいて、肩をつかみ、後ろを向かせた。その子の顔を見たとき、僕は「ワツ！」と言う声を上げて、飛び上がってしまった。真っ白な肌に、紺碧に光る目。白目は無く、目そのものが青色と言った感じがした。

その子は後ずさりする僕に近づいて来た。そして、僕の頭を掴むと、その奇妙な顔を近づけて「あははははは」と笑い声を上げた。

その瞬間、僕は体がふわりと浮いたような、ふわふわと無数の手が、僕を持ち上げているような不思議な感覚になった。だが、前の顔は消えない。僕は目をつぶると、数々の光景がまぶたの裏に映し出された。

地球がふくれあがる映像、無数のUFOが地球の上空を飛び交う映像。フワフワと浮く、クラゲのような機械が街を破壊する映像。黒い液体のような物が人の体の外から血管に入り込み、悲鳴を上げている映像。僕はそれらの映像を見る事ができなくなり、目を開けた。すると、目の前にはあの顔があった。

「ワツ！」

はじき飛ばされるようにして、僕はしりもちをついた。周りを見渡すとそこは僕の部屋だった。部屋を一通り見ると、おそろおそろ前を見た。そこには、へっへっへと舌を出して息をしているコルーパの姿があった。

「一体どうしたんだい？いきなり叫び声なんかあげて」コルーパは目をぱちくりさせた。「黙っていたと思ったら急に叫ぶんだもん。びっくりしたよ。で、質問はなんだった？」

「ああ、それなら??」と僕は言いかけたが、よく考えてみた。

質問なら時が止まってしまふ前にしたはずだ。あれから、時が戻った？馬鹿な。そんな事ができるんなら神にだつてなれる。それに、あの子供の事。コルーパに言った方がいいのだろうか。僕は慎重に言葉を選んだ。

「何故、時が止まってしまったんだ？」

コルーパは小首をかしげ、ハア？と言った。

「何の事がさつぱり」

「……本当に何も覚えてないのか？」

僕は身を乗り出して言った。

「あのときの事を全く覚えていないと言うのか？あのときお前は固まってしまって、その後どこかへ消えた。一体どこに」

「覚えてるも何も、そんな状態にはならなかっただろう？俺がどこに行つたかなんて、知るはずが無い。だつて本当に知らないんだ」

コルーパは僕の言葉を遮つて言うと、後ろ足で耳をかき始めた。

「いいかい？君はさつきまで黙っていたんだ。しばらくしたら、いきなり叫び声を上げたんだ。分かつたかい？時が止まるなんて事、あるはずが無いんだ。君は悪い夢を見ていたんだよ」

僕は納得がいかないので反論した。

「よし、いいか。僕は時が止まったとき、下に降りて昼食を確認した」

そついうとコルーパは、意地汚い奴だ。とぼそぼそと言った。僕はそれを無視して続ける。

「今から、確定している未来を話す。今日の昼食はチャーハンだ」

「君は何を行っているんだい？まあ、証拠になるかもしれないけど、匂いで分かるだろう？さつきから、プンプン匂ってくるぞ」奴は得意げに言う。

でも、僕は食い下がる。「お前は犬だろう？人間の何倍も鼻がよく利くだろうが。一緒にするんじゃない。もしも、これで昼食がチャーハンだったら、お前は本当の事を話せ。いいな」

コルーパは立ち上がると、僕の周りをぐるぐると回り始めた。

「じゃあ……もしも、チャーハンじゃなかったら」「奴は僕の真後ろのところで立ち止まる。「もう、これ以上、馬鹿なことを言わないでくれ。これから先、君が疑問に思っている事は自然と分かる……はずだ」

「『はずだ』ってことは、不確定だろ？そんな事を約束されても困る。だから、『もしも、昼食がチャーハンじゃなかったら、君は馬鹿な事を言わない。そして、君が疑問に思っている事はいずれ、僕から話す』っていう約束にしてくれ。それだったら、お前の言う事を信じ、もう馬鹿な事は言わない」

言い争っている方は真剣だけれど、聞いている側にしてみれば、とてもじゃないけれど、聞いていられないだろう。言い争いを終えた後、僕の頬が恥ずかしくて少しだけ赤くなつたのを覚えている。

喋る犬？（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

喋る犬？

僕とコルーパは一緒に下のキッチンに降りていった。キッチンでは、お母さんが昼食を作っていた。僕とコルーパはそのすぐそばまで寄って行った。

「ねえ、母さん。今日の昼食は何？」

僕はコルーパを横目でチロリと見ながら言っただけだ。でも、コルーパは気にする事も無い。というか、その顔は自信満々だ。何でだろう？そこで僕は、こいつが犬だと言う事を思い出した。もしかしてこいつ……

「あらまあ。今日の昼食はチャーハンにしようと思ってたけれど、材料がなくなってたの。だから、今日の昼食はスパゲッティよ」

何てこった。材料が無かったなんて。落ち込んでる僕をよそに、コルーパは僕のジーパンのすそに噛み付いて、僕を二階まで引っぱり上げていった。僕は部屋のドアを閉めると、怒りを抑えながら言った。「お前、分かってたんだろう？今日の昼食がスパゲッティだって。

そりゃそうだよなあ。お前は犬だもんね。匂いで分かるよなあ」僕はコルーパに顔を近づけた。「それと、お前、チャーハンの材料全部食っただろ」

すると、コルーパは僕の鼻にがぶりと噛み付いた。僕はびっくりして飛び退いた。奴は偉そうな顔をしてるけど、僕はじんじんする鼻を押さえて、ぐしゃぐしゃな顔になっていた。僕はコルーパに近づくと、右手で奴の鼻を思いっきりデコピンしてやった。「ワッ！」という声を上げて、コルーパは後ろにぼてんと転んだ。

しばらくの間、睨み合いが続いた。僕は鼻の痛みが治まると言った。

「ずるいぞ。お前は最初から分かってたんだ。だから、さっきの賭けはなしだ」

「負けは負けだろう？負け犬の遠吠えはやめといた方がいい。かっこ悪い。だろ？そんなんなら、最初に気づいとけばよかつたんだ。今更言つたって遅いぞ」

コルーパがすました顔で言った。そして、部屋を出て行くところ。

「ドアを開けてくれないか？」

僕は奴の後ろ足を掴んだ。

「でも、チャーハンの材料を食べたのはルール違反だ。男なら男らしく、堂々と勝負しろ」

奴は僕の手を振り払うと、「そいつは悪かった。でも、賭けは俺の勝ちだ」とこれまたすました顔で言った。

「そろそろ、スパゲッティができる頃だろう。天馬は昼食を食べないのかい？だったら俺がもらっておくから心配するな」

「ふざけんな！」

僕は思わず声を荒げた。そして、キッチンに行き、コルーパに取られないようにスパゲッティを早くたいたらげ、二階の僕の部屋に戻った。僕がふてくされて部屋で寝転んでいると、コルーパがとことこやって来た。

「さつきは悪かった。俺もちょっとルール違反だと思ったがこうするしか無かった」

コルーパが頭を下げる。

「つまり、俺は時が止まったときの事を覚えている。だからといって、時が止まる前の質問や、時が止まったとき俺が何をしていたかは話す事はできない。すまない。これだけは勘弁してくれ。そのうちちちゃんと話す」

「絶対だな」僕は上を向いたまま言う。すると、奴は、ああ絶対だと断言した。僕はそれを聞いて起き上がった。そして、コルーパの正面にあぐらをかいて座った。

「そこでだ。俺からも質問したい事がある」コルーパが言った。「どうして、天馬は俺が喋るのも、突然このうちに現れたのも平然と

受け止められるんだ？本当だったら、この俺を家に入れないだろう？今までの奴らはみんなそうだったけど。俺も、それくらいは覚悟していた。なあ、どうしてなんだ。教えてくれ」

僕は言おうかどうか迷った。なんせ、この事はお母さんやお父さんにも話した事が無い。それに、コルーパーが信じてくれるかどうか……でも、僕は決心して言った。

「おじいちゃんなんだ……」

僕も自分で何を言おうとしているのか。うまく舌が回らない。

案の定、奴は「へ？」と間抜けな声を上げた。

「だから　喋る犬の存在をおじいちゃんが僕に話して聞かせてくれたんだ。『わしは喋る犬なる物にであった事がある。でな、わしはその犬と一ヶ月間一緒に暮らしたんじゃよ』ってね。もちろん、そのときは全然信じてなかったよ。でも、いざ喋る犬が目の前に現れるとなると……」

「退いたりしなかったか？」コルーパーが口を挟んだ。「つまり、俺が最初に喋ったとき　ほら、この家の玄関でさ。そのときに、天馬は退いたりしなかったか？」

妙な事を聞く奴だ。でも、本当の事を話した方がいいだろう。

「うんとね……。ドン引きだったよ。びびっちゃって、足が動かなくて。で、そのときにおじいちゃんが言っていた事を思い出したんだ。だから、それほど驚かなかったんだ」

コルーパーは、ふーんと言ったきりそれ以上は何も言わなかった。

そのとき、僕はおじいちゃんが話してくれたときの事を思い出していた。あれは、僕が小学三年生のときだった。今でも鮮明に覚えている。

僕が静岡のおじいちゃんの家に行ったときの事だ。僕はあまり静岡のおじいちゃんのところに行った事が無かった。だから、そのときにおじいちゃんの家を探検した。二階の書斎に入ると、どこらともなく、おじいちゃんが来た。一体どこから来たのだろうと考え

ているうちに、おじいちゃんは指を一本立てて言った。

「いいかい、天馬。面白い話を聞かせてあげるから、もう二度この部屋には入らないでおくれ。いいかい？」

いつも年を感じさせないほど、元気なおじいちゃん。その声はいつもとより少し慌てているような、そんな声だった。

僕はそんなおじいちゃんの顔を見て、元気に「うん！」と言ったのを覚えている。

今更になって思う。一体、おじいちゃんは何を隠そうとしていたのか。何故必死になって僕を止める必要があったのか。その頃の僕の知恵のなさに悲しく思う。肝心の面白い話はそれからしばらく立つてからだった。

おじいちゃんはその事を忘れていたようで、僕が「ねえ、面白い話って何？」と聞いたところでようやく思い出したようだった。話したくなかったのか、本気で忘れていたのか。どっちだろう？そのとき僕は思った。

おじいちゃんは特等席の大きな椅子に座ると、しわだらけの手で僕の頭を撫でた。そして、ようやく話し始めた。

「いいかい、今から話すよ。面白い話ってのはね。喋る犬の事なんだ。信じられるかい？おじいちゃんは喋る犬に出会った事がある。そして、一ヶ月間一緒に過ごしたんだ」

おじいちゃんの話し方はゆっくりで、聞いているこっちがうつかり眠ってしまいそうだった。さすがの僕も、もう、小学三年生だ。そのぐらいの知恵はついている。だから僕は嫌らしく言っちゃった。「おじいちゃん、喋る犬なんて嘘だよ。この世にはそんな物存在しないよ。そんな嘘の話をされても困るなあ」

「おやおやそう思うかい？」おじいちゃんがすぐに言う。「子供は夢を持たなきゃいけないよ。それに、嘘なんかじゃない。おじいちゃんの言う事が信じられないかい？」

僕は頷いた。「だって、みんなそんな話はもうしないよ。もう三年生だもん。嘘かどうかすぐ分かるよ。だいたい、犬は人の言葉を

喋れないよ。犬の骨格では無理なんだ」

おじいちゃんは眉間にしわを寄せて、ぬつと顔を僕に近づけた。

「じゃあ、嘘だと思っ正しい。とにかく聞いてくれ。天馬もわかる日が来る」

その言葉に僕は黙った。おじいちゃんの気迫に押されたからじゃない。確かにそれもあるけど、僕はまだその言葉の意味を理解する事ができなかったんだ。僕は真剣に語るおじいちゃんの顔をまじまじと見ながら、半信半疑でおじいちゃんの話聞いていた。

「あれは七月三十一日の雨の日だった。道ばたにな、箱がおいてあってその中に子犬がいたんだよ。犬種はわからなかったけれども、寒そうに震えていた。だから、おじいちゃんは持っていた傘を立てかけて、タオルで子犬の体を拭いてやったんだ。」

次の日は晴れでな。おじいちゃんは傘とタオルを取りに行ったんだ。そしたら、子犬はいなくて、傘とタオルだけがあった。さて、どうしたものかと思って家に帰ってみると、玄関口に子犬が一匹座っていた。その子犬は昨日の子犬でな、通じないとわかってても「どうしたんだ？」と声をかけてやったのさ。すると、「これから一ヶ月間お世話になるよ。よろしくね」と喋ったんだ。なあ、不思議だろう？」

それから先は思い出せない。でも、確か僕はおじいちゃんにひどい事を言った。それで、おじいちゃんがひどく悲しい顔をしていたのを覚えている。

「おい、天馬。お前のおじいちゃんなんて言う名前なんだ？」

コルーパの声で現実に戻された。

「なあ、なんて名前だ？」

「うーんとね……確か、空野天夢だったよ」僕が言うと、コルーパは首を傾げた。

「テムム……？それって、どう書くんだった？漢字だよ」

相変わらず偉そうな口調だ。僕は犬のくせに、と心の中で呟

いた。

「お前、犬だろ。漢字とかわかるのか？わかんないのに教えたって意味ないじゃないか」

すると、すぐに奴は反論した。

「俺は喋れるだろ？だから、字も読めるんだ。漢字もわかるし、書く事だってできる」

よくわからない説明だ。喋れるから漢字も読めるし、書けるなんて 無茶苦茶だろ、それ。ちょっとおかしいぞ。でも、優しい僕は、おじいちゃんの名前の漢字を教えてやる事にした。

「天気の天に夢の夢。分かったか？」

僕が言うと、コルーパは分かったとこっくり頷くと、それっきり何も言っただけだった。??本当に分かったんだろうか？

喋る犬？（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

喋る犬？

時が止まる、という事件から一日が経った。夜は怖くてなかなか寝る事ができなかつたが、気がついたら朝だった。あまり眠くないという事はちゃんと寝る事ができたのだらう。よかつた、よかつた。あ、一つよくない事がある。コルーパがおじいちゃんの名前の話を最後に今まで喋ってない。また、どうせ散歩を要求するに決まってるけど……。とにかく夜がうるさくないのはいい事だと思う。だから、あまり眠くないんだ。うん、そういう事にしておこう。

さて……そろそろ、奴も起きて散歩を要求する頃かな。

しばらく、窓辺で朝の涼しい風にあたりながらコルーパが散歩を要求してくるのを待っていた。ふわっと吹き抜ける風とともに窓に吊るしてある、水色の風鈴がちりんと涼しい音を奏でる。んー、気持ちがいい。……それにしても、今日はなんだか遅いな。まだ寝てるのかな。まさかな。

僕はひよいと後ろのベッドの方を向いた。いつも、コルーパは贅沢にも、僕のベッドのど真ん中で寝ている。僕はコルーパをよけて寝るため、面積がどっと狭くなる。コルーパは毎日文句たらたらだけど、僕はできるだけ文句を言うのを我慢している。まあ、なんて我慢強い事。それに、文句一つ言うとコルーパが反撃するかのよう。……少し話がそれた。

コルーパはベッドにはいなかった。どこにいるんだらう。まさかもう帰って行ったのかな。まあ、その方が楽になるか……等と考えているうちにコルーパが通れるように微妙に開いてあるドアの隙間からコルーパがとことこと入って来た。

「下のソファで寝てたのか？」

僕は涼しい風にあたりながら言う。一階のリビングには大きいソ

ファーが一つだけ置いてある。コルーパは暇なときとかはそのソファアの端っこに丸っこくくなって寝ている。昨日の夜はそこで寝たんだろう。

奴は何やら考え事をしていたようで、僕が大きな声で二回目を言うまで、僕の存在胃に気がつかなかったようだ。

「んー、ああ、下で寝てたよ。どうも天馬は寝相が悪いみたいだね。それと、いびきも相当うるさかったよ。だから、昨夜は下のソファーで寝ていたんだ。これからも、寝相といびきがひどいようだったら、昨夜みたいに下のソファーで寝るから」

「ほつとけ！」

僕は怒鳴った。

「だいたいお前なあ。人ばかりに文句を言つといて、俺だって、文句はたくさんあるんだ。それに、寝相やいびきがどうだこうだつてな」

それから、五分ぐらいにわたって僕はコルーパに鋭い牙のような文句を浴びせた。

「お前だつていびきはすごいぞ。とにかくだ。自分勝手な文句は言つな！」

僕はいつの間にか肩で息をしていた。息が整つと、大きくため息をついた。

すると、それまで黙って聞いていたコルーパが立ち上がって語り始めた。

「天馬だつて、人ばかりに文句を言つなとか言つて、俺にだつて鋭い文句の集中攻撃を浴びせてんじゃん。そんな風に言っただつたら、溜め込んでないで俺みたいに言えばいいじゃん」

「僕はお前みたいに無神経じゃないんだ。お前が傷つかないように細心の注意を払ってるんだ。ただ単に溜め込んでるのと違うんだ。つまりだ。僕は気を使ってやってるんだよ。ただでさえおかしい『喋る犬』にだ。ありがたいと思え」

僕は反論した。こいつ、言えば言っつほどムカムカしてくる。全然

すつきりしない。

奴は僕の言う事についてドアに向かいながら言った。

「あー、もう傷ついた。何が『細心の注意を払ってやってる』だ。十分傷ついたよ！これで満足か！こつちだつて天馬に不満が溜まらないようにしてるんだよ！」

そう言うつと、ドアの隙間をするりと抜けて行く。

「不満なら、たんまり溜まってるとよ。お前が来た理由や、僕が疑問に思ってる事を全く語ってくれないからな！」

僕はドアの向こうに消えるコルーパーに向かって吐き捨てるように言つてやった。せいせいしたよ。全く……。

朝ご飯、コルーパーは下に降りてこなかった。今日は奴の好きなウインナーが大皿にとっさりと盛られている。横にはケチャップとマスタードが添えられている。??まあ、別に来ないなら来ないでいいんだけれど。

僕はウインナーを豪快にモグモグと口に押し込むとゆっくりしつかり噛み砕き、冷たい牛乳で流し込んだ。その後、パンにかぶりつき、早々に朝食を終えた。コルーパーが朝ご飯に来なかったおかげでウインナーをたくさん食べる事ができた。満足、満足。

僕はお腹いっぱいになってふくれたお腹を撫でながら、階段に足をかけた。ふと、後ろのソファーを見てみると、隅っこの方で不機嫌そうに丸くなっていた。

コルーパーは僕が見ているのに気がつくつと、キツと睨みつける様に眉間にしわを寄せた。このままでは、お母さんのいるところで大声で喋りだしそうだから、足早に階段を上った。

部屋に入ると、わざと音を立ててドアをボタンと閉めた。そしてそのままベッドに飛び込んだ。そして、天井を仰いだ。少し言い過ぎたかな……。ソファーにいたコルーパーの姿を思い出しながら思った。

だが、心の中の僕はすぐに首を横にぶんぶん振った。あいつだつて、悪いに決まってる。うん、そうだ。僕は無理矢理納得させた。

だけど。

丁度ドアを開けたときだった。目の前にはコルーパがいた。コルーパも僕と同じく決まりが悪そうな顔をしていた。奴から言い出すかなと思いきや、何も言わない。とにかく僕は部屋の中央に座り込んだ。

すると、コルーパも部屋の中央に来て僕の目の前に座った。コルーパはそっぽを向いているけど、僕はそのコルーパの横顔をじっと見つめてやった。しばらくそうしていると、コルーパは目だけをこっちにきゅいと向かした。それはまるで、そっちから言えって言ってるみたいだった。

「で、何のようなんだ？」コルーパが何を言いたいのかは分かっているのに、僕は意地悪く奴に言わせてやる。「何のようなんだ？」僕は語気を強める。

しばらくして、ようやくコルーパが口を開いた。

「ちよつと言いたい事があつて来たんだけど……」

それを聞いて、僕は顔がにやけないように気をつける。

「今度、真剣に話し合った方がいいと思うんだけど　天馬のいびきと寝相について」

「ほつとけ！」

僕は立ち上がった。まったく、一つの事にいちいちこだわる奴だ。あきれた僕は、期待していた言葉を言った。

「あのな、コルーパ　さっきは本当に悪い。言い過ぎた。無神経はちよつときつかった。本当にごめん」

僕が頭を下げると、コルーパはきよとした顔をした。自分が期待していた答えと違ったんだろう。コルーパは思わず「えっ？」と声を上げた。

「俺が期待していた言葉と違うんだけど……。それに、無神経がどうだかって何の事？俺が期待していたのは『さっきはすまなかつた。これからは僕が下のソファで寝るよ』って言う言葉だったんだけど」

「はあ？」僕はコルーパを睨みつけた。コルーパは、その視線をひよいとかわす。「ちよつと聞くけど、コルーパが怒ってた理由って？」僕が言うと、いびきと寝相の事さとすました顔でコルーパは答えた。

ああ……僕はこいつに頭を下げた事を後悔した。コルーパめ。きつと心の中で『天馬は何をとぼけてるんだ？』とけらけら笑ってたに違いない。コルーパを見ると、へっへっへと舌を出して息をしているが、笑い出すのを堪えているに違いない。

「ジョークがうまいね。残念な事に君とコンビを組んでお笑い芸人になるつもりはないよ」

どこまでも、馬鹿にする奴だ。思わず僕は拳を固めていた。

さすがに犬を殴るわけにはいかない。僕は奴の鼻をぱしんとデコピンした。……でこじゃなくて鼻だから、鼻ピンか？僕がうーんと首をひねっていると、コルーパはワンと吠えた。その迫力に驚いて僕はしりもちをついた。それを見て、コルーパはにやりと笑った。

「確かに、君が言っていた件についても反省はしている。こっちも言い過ぎたとは思ってるんだ。だから、君の質問に答えようと思う。今まで無理だつって言っただけだ。質問は……。えーと、何だっけかな？」コルーパが小首をかしげる。「ああ、そうだそうだ。

『どうして、俺は喋る事ができるのか』それは、君の力と僕の力が共鳴したからなんだ。僕のうちなる力のうちの一つが『人の言葉を喋る』というものなんだ。つまり、これも俺の能力の内の一つ。俺はただの犬じゃない」ここでコルーパは大きく深呼吸をした。「次の質問、『俺が何でこの家に来たか』。それは、この地球上の生き物のために来た。言い換えれば、この地球を守るために来た。そして、俺は地球を守るためにいる。以上だ」

僕はコルーパが唐突にいろいろな事を言ったもんで、頭がうまく回らず物事が整理できない。「えーと、コルーパの能力って他にもあるのか？」

コルーパは頷いた。「他の能力は、また今度話す。ただ、言える

事のできる能力は『喋る』と言うものだけだ。分かったか？」

僕はコクコクと頷く。

「じゃあ 地球を守るってどういう事だ？それに、地球を守るためにどうしてこの家を選んだ？ほかに、質問はある。今までの答えでないのがあるぞ。例えば、『どうして、時が止まったのか』これも答えてないぞ」

「どうして地球を守るか、どうして地球を守るのにこの家を選んだのか。天馬なら分かるだろう？そして、『どうして、時が止まったのか』これも、天馬なら分かる。多分な。でも、時が止まった理由も天馬は分かる。俺はそう思ってる。地球を守る事に関しては、分からなくても、時がくれば分かるさ。もしかしたら、本当に天馬なら分かるかもな。なんせ、君のおじいさんが認めたんだけ。僕も、それは認めるよ」

コルーパは「その後も、天馬なら分かるって」と延々言い続けた。おじいちゃんが僕を認めた？一体どういう意味だ？何を認めただというんだ。それに、コルーパの言った通り、僕に多くの謎が解けるのだろうか？……何だか、だんだん不安になって来た。コルーパが質問に答えてくれたおかげで、謎がまた一段と増えてしまった。ああ……どうしよう……。

喋る犬？（後書き）

読んでいただいております。
徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体？

僕はベッドの上に寝そべって、頭をフル回転させていた。横の窓には、ノートとシャーペン、消しゴム。僕なりにいろいろと考えてノートに書いてみた。

でも、謎が多すぎるのと、その謎がややこしいのでノートはぐちゃぐちゃになっていた。この状況に至るまでの間に昼食の時間が入っていたのだが、余談として聞いてもらいたい。

今日の昼食は、お母さんがいないので、コンビ二で唐揚げ弁当を買って、部屋でたいらげた。コルーパを閉め出して食べたので盗られる事はなかった。

食べて満腹になると、机の奥から新品のノートを取り出して謎を解明するために、頭をフル回転させていたという訳だ。

でも、頭を使ってばかりではいけないので、僕はひとまず休む事にした。目をつぶると、音がよく耳に入る。時折、吹き抜ける風が風鈴をちりんと鳴らす。僕は、あまりの心地よさにぐっすりと寝入ってしまった。

目が覚めると、もう日が沈んでしまいそうだった。僕ははっと起き上がると、ノートを取り、カリカリと書き始めた。これでつじつまが合えば、この謎は解明した事になる。それには、何か足りない。ここで少々、何故僕が謎を解明できそうになったか書いておこう。その理由は夢の中にある。

夢の中、僕は時間が止まっている中にいた。昨日と同じ様に笑い声が辺りに響く。コルーパはというと、僕の目の前に固まって座っていた。

まあ、いい。こいつはほっといて、さっさとあの少年を追おう。

僕は外に出て急いでコルーパと初めてであった場所に向かって走った。やっぱりそこには、僕に背を向けている少年がいた。いや、

少年だけじゃない。コルーパまでもがいる。一体どういう事なんだ？
「どうして、コルーパがここにいるんだ。あのときは、ここにいなかったはずだよ」

僕がコルーパに言うけれど、コルーパは反応しない。よく見ると、コルーパはあの少年と向かい合っている。それに、何故かコルーパは少年に向かってウーツと唸っている。そして、僕がいるのに気がつくとうんと吠えた。

「来るな、天馬！お前はここに来ちゃ行けなかった！」言うところ、すぐに少年に向き直った。「天馬、離れる！どうしてここに来たんだ！」

僕は訳が分からなかった。これは夢のはずだ。何でだ？こんな場面、見てないぞ。

「どういう事だ！説明しろ、コルーパ！」

すると、少年がコルーパを無視して僕の方に向いた。この顔はしっかりと覚えている。忘れるはずがない。人間の顔なんだけど、人間じゃない。目自体が青色に染まっている。僕がこの少年に一言言おうと、口を開きかけたとき、少年の目が青色に光った。

「うるさいっ！」

少年の口が開いた。その瞬間、ぶわつと空気が海の様には波だったかと思うと、僕とコルーパは吹っ飛ばされた。そして、その周囲の家の窓がパリンという音を立てて割れた。

僕はそこで目が覚めた。現実か、夢かは定かではない。先ほど『夢』と書いたかもしれない。でも、それは僕が夢だと思いたいものとして認識してほしい。

カリカリとノートに書いていて、また僕は詰まった。そのページをビリビリと破ると、くしゃくしゃにしてゴミ箱にシュート。僕が投げた、紙のボールは見事ゴミ箱にゴールイン。……やったぜ。

僕は満足すると、立ち上がった。外に出て、コルーパと初めてであつた場所へ急ぐ。

もちろん、そこにはあの少年もコルーパもない。僕は、ふと周

りを見渡した。ぐるりと見て、ある一点で僕の視線は止まった。家の窓ガラスが割れている。反対側の家もそうだ。粉々に割れている。さらに、僕は足下を見る。そこには、何かが発火したような後があった。本物みたいに濃くはない。でも、微かに焼けた匂いがする。あの夢のおかげで、謎が解けると思ったけど、ますます謎は深まっってしまった。

でも、僕にも一つだけ謎が解けた。あの僕が夢だと思っていたものは、夢ではなく現実だったって事だ。

うーん、でも、そうなるって僕がどうやって、あそこに行ったかっ
てことが最大の謎になる。なんせ、僕が夢だと思っていたものから
目が覚めたとき、僕はベッドにいた。確かに、僕は寝ていたんだ。
でも、あの出来事は現実で起こっていた……。

あー、もうやめた！僕は家に向かって歩き出した。帰り道、窓ガ
ラスにひびが入った家が目に留まったけど、僕は目をそらして歩い
て行った。

家に帰ると、玄関口にはコルーパがいた。僕が靴を脱ぐと、コル
ーパがこっちに来いとも言う
様に、首をひよいとやった。

僕はきどつて歩いて行くコルーパについて行くと、そこはリビング
グだった。ちょうど夕方のニュースがやっている。僕はソファーに
どっこいしょと座って、テレビを眺めた。??どっこいしょって、
おじさん臭いかもしれないけど、僕だって疲れてるんだ。だから、
僕は気にしない。

ニュースは、地震についてだった。キャスターの横で地質学者み
たいな人が何やら難しい事を言っている。どうやら、夕方の地震の
事ようだ。……夕方に地震なんてあったか？震源地のところを見
ると、なんと、この近くだった。

地質学者が解説を終えると、次は自称、宇宙真理学者が出て来た。
聞いていると、地震の発生した時間に世界各地でUFOの目撃情
報が殺到したようだ。一番目撃情報があったのは、日本だった。

特に、ここの地方で多く目撃されてようだ。ここ最近、UFOの目撃情報は多く、目撃者もたくさんいたようだ。この学者さんも見たようだ、写真や動画を撮り忘れたと、たいそう悲しそうだった。最後にこの学者さんは、UFOこそ私の全てです、と言った。学者さんがいなくなった後も、UFOの事がずっと続いた。

地震とUFOなんてどこが関係あるんだ？もう一度、テレビに顔を向けると、ニュースキャスターが、「実は、地震が起こった時間帯と、UFOの目撃情報があった時間帯が一致していたのです！」と叫びに近いような声で言っていた。ふと、コルーパを見ると、真剣な目でテレビを睨んでいた。

僕はお母さんに地震の事を聞いた。

「ねえ、地震っていつあった？」

すると、お母さんはしばらく考えた後、答えた。

「そうねえ、四時ぐらいだったかしら」

四時と言うと、僕が昼寝していた時間帯だ。いや、待てよ……寝ていたのか？あの夢は何だったんだ？僕はテレビを睨んでいるコルーパを見て思った。??明日、徹底的に尋問してやる。

僕がコルーパを睨むと、奴はワンと吠えた。まるで、無駄だよ、って言ってるみたいに。コルーパは僕が睨んだ事に気がついていたのかは分からない。テレビに向かって吠えたのか、それとも、僕が睨んだのに、気がついたのか。

もし、気がついたんだとしたら、どこまで僕が思っている事が分かったんだろうか？

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体？

昨日は、テレビを睨みつけているコルーパの気迫に気圧されて、声をかける事ができなかった。あの後も、何か思い詰めたような顔で、僕に喋りかけようとしなかった。

一体奴は、テレビを見て、何を思ったのだろうか？奴は、それほどUFOが好きなのだろうか。あれは、好きというより、敵対視しているという方が合っていると思う。コルーパは何を敵に回しているのか。まさか、宇宙人ではないだろう。

そのとき、僕は唐突にコルーパの言葉を思い出した。『地球を守るためにここに来た』僕の頭の中で、何かがつながった。僕は二階に駆け込んだ。コルーパはというと、僕のベッドの上で寝そべっていた。僕はベッドに座ると、僕は勝手に話し始めた。

「お前は宇宙人から地球を守ろうとしているんじゃないのか？あの青い目をした少年、あいつは宇宙人だろう？そして、人の言葉を喋る犬。そこに宇宙人、UFOという、現実離れたキーワードを当てはめると、合点が行く。そうでもなければ、お前は何かから地球を守る？どうして喋る？僕は今までの事が全て宇宙に繋がってると思うんだ。あの少年は宇宙人だ。それは確かだ。お前は奴らと敵対関係にある。僕たち地球人と奴らの関係は知らない。そして、奴らは昨日、僕ら地球人の様子を探っていた。だから、UFOの目撃情報が殺到したんだ」

コルーパは何も反応しない。でも、僕はコルーパが言うのを待っていた。「何を馬鹿な事を言っているんだい？」って。

でも、コルーパは身動き一つとらない。僕はさらに続ける。ここで、本当は言っただけだった。コルーパの正体が何かを。でも、やっぱり、コルーパは何も言わない。

「僕が見た夢 いや、こう言った方がいいかな。僕がいた異次元の世界に、コルーパとあの少年はコルーパはいた。何故、異次元か

と言うと、時が止まっていたからだ。それだけじゃない。あの少年は波みたいなのを起こして、窓ガラスを割った。でも、表向きの世界では、地震があった。つまり、宇宙人は何でもありだから」「馬鹿げたことを言うんじゃない。もし、そうだとしたら、一番最初に時が止まったときに俺はどこにいたって言うんだい？」

「コルーパが僕の言う事を遮って言った。」

僕は大きく息を吸う。そして、静かに言った。

「僕のおじいちゃんの家　静岡の天夢おじいちゃんの家だ」

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体 ?

「何の証拠があつて、そういう事が言えるんだい？」

しばらくしてコルーパが口を開く。だけど、僕の目を見ていない。そつばを向いて吐き捨てる様に言った。奴は自分の形勢が不利になると、すぐにこういう態度に出る。全く困つたもんだ。

「どうしてだと思つ？」僕は逆に聞く。「お前は自分で自分の形勢を不利にしたんだぞ。僕は、お前の訳の分からない台詞を聞いて考えたんだ。ま、つい口にしてしまったようだが。……覚えてないか？僕がおじいちゃんの話をした次の日の事」

コルーパはしばらく考えていたが、思い出したのか、そつばを向いたまま、「……あ」と呟いた。どうやら、自分が犯した、重大なミスに気づいたようだ。

「あれねえ……」コルーパがもつたいぶつた様に言う。「あれは、そういう意味じゃなくてね。その……つまりだな」

僕には分かる。コルーパは今、一生懸命、言い訳を考えている。「で、お前は僕のおじいちゃんの家で何をやっていたんだ？」僕は早速尋問にかかる。「行つたんだらう？一回目に時間が止まつたとき、お前はどこにもいなかった。けれど、二回目にはお前は僕たちが初めて出会つた場所にいた。一回目のときに、おじいちゃんのところに行つたんだらう？」

「……行つたよ」

しばらくして、消えるような細かい声で言った。

「君のおじいちゃんの家。確認したかつたんだ。天馬が本当に、天夢の孫かどうか。それに交代の申請をしなければならなかつた」
「何の申請だ？」

コルーパが僕の方を向く。その目がやけに真剣だ。

「宇宙外交官。宇宙人が、最近各地で確認されているだろ、サ

イザンフ星人と『宇宙友好的条約兼会合出席義務条約改正委員会』
や『宇宙親好定例会』等、地球やサイザンフ星で数々の会議、友好
関係を築くための食事会等がある。サイザンフ星と地球じゃ、時間
の進み方が違うんだ。例えば、向こうが三年経っていたとしたら、
こっちは二十年とか。そこで、外交官を交代させて行く上で、今年
の外交官はこいつにしましたよ、っていう書類をサイザンフ星に送
るんだ。五十年ぐらいに一回、一ヶ月間ぐらいこれらの事は集中的
に行われる。初めての『宇宙友好的条約兼会合出席義務条約改正委
員会』が明日行われる。だから、今日、今から正式に登録をする」

僕は口をあぐりと開けていた。　　おいおい。冗談きついで。
念のために僕は聞いておく事にした。

「それって、本当？」

「コルーパは僕の目を真つすぐ見据えて言った。

「ああ、本当だ」

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体 ？

僕はくらくらした。危うく気絶してしまいそうだった。

「で、何で今まで黙っていたのに、急に話す気になったんだ？」

「そりゃあ、『宇宙人友好的条約兼会合出席義務条約改正委員会』があるからに決まってるだろ。それに、サイザンフ星人も視察に来ている。そうじゃない奴らも混じっていたかもしれないが。まあ、そういう事だ」

僕が聞くと、コルーパはペラペラと喋った。僕は適当に頷いて、本題に入る事にした。

「じゃあ、聞くけど、どうして僕がそんな事をするはめになってるんだ？」

「教えてもいいけど、少々面倒くさいぞ。それでもいいならいいんだけど……。さっき言っただろ、五十年ぐらいに一ヶ月間の間、宇宙政治的な事が集中的に行われるって。で、その始まりは地球誕生のときからなんだ。当時、サイザンフ星人が出来たばかりの地球を自分たちの領地にしようと、宇宙船に乗って地球までやって来た。けど、情報が遅かったんだろうね。来たのは人類が誕生してからだった。サイザンフ星人は当時、宇宙の中でも、最も権力と勢力を持っていたんだ。だから、力づくで人類を攻め滅ぼそうとした。けど、地球にいた誰かがそれを止めたんだ。その誰かがサイザンフ星人との友好関係を築き上げ、その友好関係を崩さないための存在として、宇宙外交官が人類の中から選出された」

コルーパはそこで一旦、大きく深呼吸をした。僕はコルーパの顔を覗き込むようにして質問をした。

「あのさ、誰かがサイザンフ星人との友好関係を気づいたって言うんだけど、その誰かって誰のことだ？」

するとコルーパは、顔をそらして「誰かさ」と静かに言った。

「だから誰なんだよ！」という言葉は僕は飲み込んだ。

何故か、コルーパの目がすごく怖くなっていたからだ。コルーパがこんな目をするのを見たことがない。僕はどうすればいいのかわからなくなり、たじろいだ。すると、コルーパがそっぽを向いたまま吐き捨てるように言った。

「初代宇宙外交官が誰か知りたいたいののはわかってる。でも、俺は言えない。それに君は真理に触れてはいけない」

「どういうことだ？」

「既に、君は真理について一つ触れてしまっている。これまで、そこまで頭の機転が利くやつがいなかった。君のおじいさんもまた、君のような奴だった。真理に二つ触れ、世界を崩壊へと導こうとしていた。彼は俺の正体を見事見破った。君も 天馬もうすうす気づいているんだろう？それで、君は二つ目の真理に触れてしまうことになる。地球の人間は三つの真理に触れることでその星を滅ぼす『縛り』の呪いにかかっている」

「誰がそんな呪いをかけたんだ？」

僕はできるだけ冷静な声で聞いた。

「悪いな。僕はもう、お前の存在とお前の言い分を信用できなくなってきた。これは夢だ。僕は悪い夢にうなされているんだ。お前の言う『宇宙外交官』にはならない」

僕は目をつぶり、十まで数えてから目を開けた。そこには、あの青い目の少年がいた。

「なんでいるんだよ……」。僕は心の中でつぶやいた。

「こいつに会っただろう？」

少年がコルーパの声を喋っている。すると、少年が崩れ去り灰になっ

「なんだ、今は……」。

「俺のことを信じるんだ。信じ、ついて来てくれ。そうすれば、今日、全てがわかるはずだ。頼む」

「しょうがないなあ。そこまで言うんだったら」

聞きたいことはたくさんあるけど、そのうちコルーパが話してくれるだろう。僕は顔がにやけないように言った。

「それじゃあ、ついて来てくれ」

コルーパと僕は始めてであった場所へ行く。だけど、いつも何だか様子が違った。地面に大きな穴が開いている。コルーパはそこへ飛び込んだ。

ちよ、ちよっと待ってよー。言うのも恥ずかしいので、心の中で叫ぶ。

僕も、コルーパに続いて目をつぶって飛び込んだ。

何だか、不思議な感じだ。落ちている感じがしない。でも、落ちている。何て言ったらいいのかな。ふわふわ浮いている感じ。でも、怖いわけじゃない。僕らは空を逆さまに落ちている。叫ぼうにも叫べない。というか、叫ぶ気にもならない。だって、何だかとても落ち着いている。

しばらく逆さまに落ちた後、空中でとまった。この高さだと、家がありより小さく見える。気づいたら、コルーパは空中を歩いていた。その先には階段がある。置いて行かれないように、僕はおそるおそる足を伸ばす。すると、途中で何か地面に当たるような干渉があった。両足を着けると、また重力が復活したように、ふわふわとした感覚はなくなった。そのまま、コルーパに付いて、階段を上る。階段は十段ぐらいで、上りきると、そこにはもうひとつの世界があった。

あたり一面原っぱで、蝶々がひらひら舞っている。時折、気持ちがいいそよ風が吹く。原っぱの先には、とてつもなく大きい木が生えている。幹の太さは中学生が百人つないでも届かないようなくらい。葉っぱは 生い茂っているんだろうけど、上を見上げてもどこにも見当たらない。

こんなのが、どうして木ってわかるのかって？そりゃあ なんとなくかな。どう考えても、こんなところに生えてるものっていつ

たら、木ぐらいしかないだろうって感じ。でも、ここどこ？
その問いに答えるかのようにコルーパが言った。

「ここは儀式の間。宇宙外交官候補はここで儀式をする。そして、
はれて宇宙外交官になれるってわけだ」

『はれて』って言うてるけど、僕は宇宙外交官なんてものになり
たいなんて言った覚えはない。それに思わない。というか、なりた
くない。というのが本音だ。

コルーパは、おかまいなしにどんどん進んでいく。そのまま、木
の幹の前に立ち止まった。そして、くるりと、こちらを向いた。

「ここで、本当に宇宙外交官候補かどうか検査をすることになっ
てる」

そう言い終わらないうちに、巨大な蚊のようなものがブーンとい
う羽音を立てて、どこからともなく飛んで来た。

その蚊は僕の首の後ろに來たかと思うと、その巨大な針を僕の首
に突き刺した。痛っ！と思ったけど、痛くなかった。僕はコルーパ
に、この巨大な蚊は何なのか聞いた。

「そいつは、遺伝子情報を確認するために血をとってるんだよ」

「何で、遺伝子情報なんか確認するんだ？」

すると、驚いたような顔をした。「あれ？言うてなかったっけ？

初代宇宙外交官は誰かは言うてないけど、君もおじいちゃんも初代
宇宙外交官の祖先なんだよ」

「初耳だ」

僕はコルーパを睨む。奴はススツと僕の視線をかわす。

まったく困った奴だ。

僕とコルーパは、木の前に立つ。しばらく立っていたままだった
けど、コルーパが木に向かって歩き出す。

おいおい、ぶつかるぞ！と思ったら、コルーパは、ふわつと
木の中へ消えていった。はっとした僕はあわてて木に向かって歩き
出す。機にぶつかると思った瞬間、僕は目をつぶった。そのまま歩
いていったけど、木にぶつかった感覚はない。恐る恐る目を開ける

と、目の前は階段だった。どこまでも上へと続いている螺旋階段。どうやら、ここは木の中のような。僕はコルーパに追いつくように少しだけ早く上る。

不思議な素材でできたこの階段、一段一段上がるたび、階段がポーンと不思議な音を奏でる。なんだか、背中がゾワゾワする。見知らぬ土地を一人でいると、ものすごい不安に襲われ、逃げ出したくなる。今はそんな感じ。途中、コルーパと合流し、階段を上りきる。そこは、巨大な葉っぱが多い茂る木の枝にあたる部分だった。枝の上をすたすたと歩いていくコルーパに続いてふらふら歩いていく。枝の先には台座があつて、その上に石でできた方位磁石のようなものが置いてあつた。

コルーパが振り向いて言う。

「正しきものが触れば、聖なる場所へとつながる。心悪しき者が触れば、地獄へつながる」

僕は恐る恐る聞く。「心悪しき者って?」

「宇宙外交官の力を使って悪巧みをするもの。結構いるよ。知っている人は知ってるんだね。一年に十人以上来てる。まあ、偶然入り口を見つけただけかもしれないけど。夏になると、あの入り口は姿を現す。この方位磁石は宇宙のものだ。サイザンフ星のは、西を指すようにできているんだ。まあ、悪しき者が触っても何の反応も示さないから、そのまま西へ向かって歩き出す。見えない道は続いているけど、途中で崩れる。で、そのまま雲を突き破って地上に落ちる」

「うちの町の都市伝説で、夏に、血の雨が振るって言うのがあるけど……」

「うん。人が落ちてくるんだよ。その神社の和尚さんはサイザンフ星人と地球人のハーフで、落ちてきたら片付けてくれるんだ」

……なんて恐ろしい話だ。

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体 ？

僕は大きく深呼吸する。そして、下を見る。やっぱり真下に広がる町がありよりちいさい。

もう一度深呼吸する。そして、コルーパに聞く。「正しき者ってのは？」

「もちろん、宇宙外交官だ」

僕は、方位磁石の側面についている手形に合わせて触れる。すると、方位磁石の針がぐるぐる動いて、方位磁石そのものが光り、だんだん熱くなる。

「手を離せ。溶けるぞ」

それを聞いて僕はすぐさま手を離す。

やがて針が止まると、北東の方角を向いた。でも、道は現れない。どっちみち、道は見えないようになっているみたいだ。

コルーパが、方位磁石が指している方角を向いたまま言う。

「ここからは私語は禁止となっている。下に落ちたくなかったら喋らないことだな」

僕はガクガクと頷く。コルーパは満足したように頷くと、見えぬ道を歩き始めた。僕もその後ろをついていく。百メートルほど歩いたらコルーパが下に落ちた。叫び声を出しそうだったけど、両手で口を押さえる。そして、目をつぶってまっすぐ前に向かって歩く。すぐに、落ちる感覚。もう、だめだ。叫んでしまおう。と思った瞬間、ふんわりと地上に降りた。目の前を巨大な湖が広がっていて、真ん中に橋がかかっている。コルーパと僕はその橋を歩いていく。途中、霧がかかり始め、そこからさらに進むと、もう前は見えなくなった。でも、そのまままっすぐ進む。

やっと霧が晴れたと思ったら、もう、湖を渡りきっていて、真っ白な空間の中だった。部屋だけど、どこもかしこも真っ白。入ってきた入り口さえない。真っ白い部屋の中央に真っ白いすが置いて

ある。僕はそこに座る。すると、どこからか男の人の声が聞こえてきた。

「汝、宇宙外交官なるものであるか?……答えよ」

「あつと……えー、はい。僕は宇宙外交官です」

僕は少々うるたえながらも答えた。すると、また声が聞こえてきた。

「真である?ならば、この犬は何者であるのか、答えて見せよ」

僕は、コルーパを見る。だけど、コルーパはこっちを向かない。なるほど、これがコルーパの言っていた真理なんだな。そのひとつを答えるって言ってるんだ。僕がどれほど宇宙外交官に向いているか、どれだけその非現実的な答えを受け止めれるか。そこで、宇宙外交官としての素質が変わってくる。ふーん。ここはどう答えるべきか。

「さあ、答えよ」

せかす、男の人の声。待っててよ、ちゃんと答えるんだから!心の中でそう叫ぶ。僕はわかっていることを一つずつ頭の中で整理し、慎重に言葉を選びぬく。

「この犬は 宇宙人です」

そう答えると、男の人の笑い声が部屋に響き渡る。

「よろしい。汝を宇宙外交官として認めよう。さあ、受け取るのだ」
部屋のどこからか、青い石がふわふわと飛んできた。僕はそれを右手で取る。すると、石は、僕の右手に吸い込まれるかのように消えていった。

「これにて、宇宙の儀を終わる」

その声が聞こえたかと思うと、僕とコルーパは最初に飛び込んだ穴があった場所に立っていた。

「それで?……どうということなんだ?」

僕は横目でコルーパを見る。奴はどこか遠いところを見て言う。

「わからないな。それよりこっちのほうが聞きたい」コルーパが僕

を見上げる。「本当に俺が宇宙人だと思ってるのか？」

僕はコルーパの視線をかわす。

「まずこっちが聞きたい。あれはなんだ？ たんだ？ あの部屋は何なんだ？」

「儀式の間。男の人の声が聞こえたと思うけど、あれは首相だ。サイザンフ星の最高指導者。あれはテストだったんだ」

「テスト？」

「ああ、そうだ。俺には首相が言ったことは聞こえない。天馬にか聞こえない。あの時首相はこういったんだろう？ 『この犬は何者か』。その答えのようによっては君が宇宙外交官になれるかなれないかが変わってくる」

それを聞いて、僕はさっきから聞いたかかったことを聞く。

「あのさ、宇宙外交官ってそんなにいいものなの？ ほら、さっき言ってただろ？ 年に十年ぐらいくるって」

「だけど、コルーパはすぐには答えなかった。なんていうんだろう。言ってもいいのか迷ってる感じ。しばらく遠いところを見て、また僕を見上げた。」

「石を渡されただろ。みんなはあれを狙ってるんだ。ほら、この町の伝承なんかで、あるだろ。『空から降る神の涙、その涙に」

「宿りし神の力。その力を使ってバンバルジを呼びたもう』……」

「……バンバルジって何だ？」

「首相の名前だ。もちろん、あの石は神の涙なんかじゃない。まあ、それに匹敵する力を宿していると言っても過言じゃないけどな。あの力を手に入れた地球人は、進化する」

その言葉に、僕は思わず、は？と言ってしまった。だけど、コルーパは気にせずに続ける。

「まず、強靱な身体能力、体を手に入れる。ビルに下敷きにされたくらいじゃ、死ぬことはない。飛行機が飛んでいる高さぐらいは簡単に飛び越せる。そして、サイザンフ星人と話すことができるようになる。首相は例外としてだ。そして、最悪の事態になったとき

の武器となる」

「最悪の事態って？例えば宇宙人の襲来とか？」

僕が冗談っぽく聞くと、コルーパは違つて重々しく頷いた。

「うむ、そういうことになるな」

「……………やめてよ。」

すると、突然後ろからクラスメイトの野崎に似ている声がした。

「嘘よ！犬が喋るなんて……………。私どうしちゃったんだろ。」

さあ、話してくれない、空野君。全部」

振り向くと、長い黒髪を揺らしながら、えらそうに言葉を連ねる

野崎理香がいた。

野崎は同じ二年B組のクラスメイトで学級委員をやっている。男子は偉そうだつてみんな言ってるけど、女子には人気がある。全部自分が正しいと思ひ込んでいるから、会話がかみ合わない。それも男子だけらしいけど。

こつそり、コルーパに耳打ちすると、ふうんとやけに素っ気無かつた。

でも、野崎に見られてしまった。さて どのように説明したらいいのかが。

「さあ、早く話して。私が納得するように」

納得するようになって言われてもなあ。どんな風に話しても納得しないと思うんだけどな。よし。ここは嘘を突き通すことにしよう。

「こいつに人間の言葉を教えてあげてるんだよ。ほらこれからの世界、人間の言葉は役に立つと思つてね」

僕の必死の言い訳を野崎は冷たい目で見ている。だいぶ気まずい状況だな……………。

「劇だよ劇、！人間の言葉を覚えさせるために、犬相手に僕たちが今度やる劇の練習をしていたんだよ」

「うちのクラスで劇なんかやらないわよ」

野崎が冷たく言い放つ。……………かなりまずい。どうにか脱出しないと。

「あ！もう、こんな時間だ！塾があるんだ、帰らなくちゃ。というわけで、じゃあまたな野崎。あんまり、分けわかないことを言うなよ！」

僕はコルーパーを抱き上げて、家に向かって走り出す。

走っている音にまぎれて、野崎の大きなため息と呟きが聞こえた。

「……塾なんか言っていないくせに」

僕はそれを見事に聞き流した。

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体？

「そういえば、聞き忘れていたけど、君は本当に俺が宇宙人だと思っ
ているのかい？」

僕の部屋で、コルーパが睨みつけるように言う。だけど、僕は
それどころじゃない。野崎に、コルーパが喋っているところを見
られてしまった。あれで、うまく誤魔化せられたのかどうかはわか
らないけど、あれは痛手だった。

コルーパが、なあ、どうなんだよとしつこいので、まったく聞い
ていなかった僕は、うん、まあなと適当に言葉を濁す。それがわか
ったのか、コルーパの視線がやさしくなる。そして、僕の顔を覗く。
「天馬はあの子が気になってるみたいだね。さっきの君の説明もず
いぶんと詳しかった。それを踏まえると、君は彼女を良く見ている
それに、話している間、君はあの子から視線をはずさなかっただろ
う？」

「違う。視線をはずさなかったんじゃない、はずせなかったんだ。
それに、クラスの中でも、僕は情報通なんだ。あれくらいのことは
当然だ」

僕がそう言うと、コルーパはそっぽを向いて「つまんね」と吐き
捨てるように言った。僕もそっぽを向いて、どうせつまんないです
よ！と心の中で叫ぶ。「ふん！」僕はコルーパによく聞こえるよ
うに言う。

しばらくの沈黙の後、コルーパが思い出したように、あ！と声を
上げた。何を思い出したかは見当がついている。

「コルーパは、犬の癖に人間の言葉を喋るだろ。それに、あそこに
行くまでの間にあった方位磁石。コルーパが方位磁石は宇宙の者だ
って言ってただろ。だから、ピーンときたんだ。コルーパは宇宙人
じゃないかってね」

僕がそういうと、別に驚いた様子もなく、僕に聞いてきた。

「天馬は俺が宇宙人だつてことが、真理だとは思わなかったのかい？」

「思わないね。コルーパはあれはテストだつて言っていた。世界を崩壊に導くようなことをわざわざ問題にするわけがないだろ？前に僕は真理に一つ触れてるつて言つてたけど、あれは嘘だろ。宇宙外交官を困惑させてテストの答え方を難しくする。僕と僕のおじいちゃん以外、宇宙人だつて答えた人はいなかったんじゃないかな。でも、いちいち不合格にしていたら、会議などに間に合わない。だから、仕方なしに合格にしていた。これは僕の憶測だけど、答え方によつて会議などの内容が変わつてくるんじゃないかな。よりいい答え方を出した人には、より高度な中身をその人の頭に叩き込まなければならぬ。もちろん、悪い答え方をした人も、会議をやらなければならぬ。そうしないと、どんどん遅れが出てくるからね」

コルーパはしばらくボーっと聞いていたけれど、僕が顔を覗いたら我に帰つたように、僕と視線を合わせた。

「いやあ、お見事お見事。言うことなしたよ。まさかそこまでわかつているとはね。驚きだよ。君のおじいさんもそうだった」

驚きだよつて言っているわりには、あまり驚きの表情を見せない。ということはおじいちゃんもこのぐらいのことは言い当てたのだろう。それよりも、僕はおじいちゃんのところに行きたい。この犬が、おじいちゃんの言つていた喋る犬なのかどうか確かめたい。

「コルーパ、僕は明日、おじいちゃんの所に行く。いいよな」

僕が確かめるようにして言うと、コルーパは首を振った。

「だめだ。明日は『宇宙友好的条約兼会合出席義務条約改正委員会』があるつて言つただろう。覚えてなかつたのか？ ああ、これから先が思いやられる」

まったく一言多い奴だ。これから先が思いやられるのはこっちだつて！ ああ、会話をしていると、いらいらしてくる。

「それで？その『宇宙友好的条約兼会合出席義務条約改正委員会』」

「つてのはどういふ会議なんだ？」

「僕が聞くと、コルーパが領いて話し始める。」

「『宇宙友好的条約兼会合出席義務条約改正委員会』つての言うのは、ややこしい名前がついているけど、基本的に新しい宇宙外交官と首相、そして、首相と一緒に来るサイザンフ使節団の面通しということになっている。使節団は首相と一緒に来るか、または重要な用件の確認をしたり、新しい予定の通達をしにくる」

「ここまではいいかい、とでも聞くかのように僕を見るコルーパ。」

「僕は頷く。すると、コルーパはまた話し始める。」

「『宇宙友好的条約』は、地球とサイザンフ星が友達にあたる関係にありますよ、ということを確認し、その関係を結ぶための条件を確認しあうんだ」

「条件つて？」

「僕が聞くと、コルーパは睨んできたけれど、ゆっくり教えてくれる。」

「条件つていうのは、例えば君のおじいさんが結んだ条件は、サイザンフ星人は地球に許可なく降り立つことを禁ずる。しかし、地球人とサイザンフ星人は互いに助け合わなくてはならない。つまり、サイザンフ星人は勝手に地球に着ちゃいけないけど、サイザンフ星がピンチのとき、または地球がピンチのときはお互いに助けなくてはならない、ということだ。それで、さっきの話に戻るけど、『会合出席義務条約改正委員会』は首相と、地球人が必ず会合に出なくてはいけないという条約の見直し、または改正を行う。今はサイザンフ星が有利なほうに傾いているけれどね。説明すると、ざっとこんなものだ」

「僕は啞然としていた。ものすごい宇宙規模の問題だ。宇宙外交官つて名前を背負うにはこんなにプレッシャーがかかるものなのか。僕の言動一つ一つに地球の命運がかかってくる。とんだ仕事を引き受けてしまったと、僕は今更ながら後悔した。僕は震える声で言う。『わかったよ。明日はおじいちゃんの所には行かないよ。でも、そ

の会議はいつたどこでやるんだ？場所がわからなくちゃだめだろ」
「それは、言わなくてもいいと思っただけだな。 会議はこの家の二階のこの部屋でやるに決まってるだろう」

この部屋って……。僕の部屋？まさか、勘弁してよ。

……ん？待てよ。宇宙人が来るんだったら、だいぶまずいことになる。なんつたって宇宙人だ。お母さんが見たら気絶しちゃうよ。

コルーパに言うと、頷く。

「心配なのはわかるけれど、ぜんぜん大丈夫。サイザンフ星人は、地球人に似ているし、ちゃんと地球人に変身して、君の友達のように平然とやってくるから安心して」

友達のように、平然とやってくるから安心してって言われてもなあ。そうすると、こっちがびっくりして気絶してしまう。ましてや、知らない人が知り合いのようにやってくるだなんて……。これは、相当覚悟しておいたほうがいいな。

すると、僕の心の声が聞こえていたかのように、コルーパがやさしく慰めるようにしていった。

「うん。覚悟は必要だろうね。けれど、そんなに凝り固まる必要はないと思うんだ。誰だって、はじめはみんな同じさ」

コルーパの癖に、なかなかいいことを言うじゃないか。固まっていた筋肉が揉み解されていく感じが全身を駆け巡る。僕は肩の力を抜いて、ふうと大きく息を吐きだす。

しばらくの沈黙の後、家のドアチャイムがピンポンと響いた。僕は部屋にコルーパを閉じ込め、階段を駆け下りる。ドアを開けるとそこには、クラスメイトの尾方竜介がいた。竜介はクラスの中でも、体が大きく責任感があり、クラスの中でも兄貴的な存在感がある。そのため、男女問わずに人気がある。

彼は何だか面白そうな顔をしていた。「よお」と言うなり、上がらしてもらおうよといいながら、僕の部屋に向かっていった。

「いや、そこはちょっとやめろよ」

「何か見られてはまずいものでもあるのかい？」

「いや、別にないけれど……」

「だったらいいよな、と階段を上りだす竜介。コルーパーを見られてはまずい。僕は竜介にくつつくようにして階段を上る。突然、竜介が階段の途中で立ち止まった。僕は竜介の背中にぶつかって、階段をクルクルと転げ落ちてしまった。」

「痛いな……。急に立ち止まるなよ、竜介」

僕は階段の角でぶつけた頭をなでながら言う。ふと、竜介を見ると僕を睨むようにして見ている。あれ？僕にぶつかられたのがそんなに嫌だったのかな？僕が誤ろうとして、口を開きかけると、竜介の目が急に優しくなる。

「そういえば、さっき野崎と何か話していたよな」

見られていたのか……。でも、会話までは聞かれてはないだろう。僕は安心して返事をする。

「うん。話していたけれど、何かあった？」

「うん、そうだねえ。聞きたいことは野崎と一緒にたくさんあるんだけどな。喋る犬について。何も、親友に隠し事は必要ないよな」

その言葉に僕は固まってしまった。竜介にもばれてしまったのか。「なっ！」と喋ってくる竜介に、ただ僕は頷くことしかできなかった。

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

宇宙外交官とコルーパの正体？

「なあ、どうすればいい？」

僕は二メートルほど前で正座をしている竜介に気づかれぬように、小声でコルーパに聞く。竜介もこつちをじっと見ているから、なるべく口を動かさないように正面を向いて話さなければならぬ。これが、なかなか難しい。

「こういうときに、石の力を使ってみるんだ。練習だと思って、彼に『あなたは何も聞いていない。何も知らない』と暗示をかけるようにして言うんだ。ポイントは相手の目から視線を離さない事。それと、体の中にある意志の力を感じる事」

そんなんで、誤魔化す事ができればこんな苦勞はしないよ、と思いつつ。竜介の目をまっすぐ見据える。

「それで、この犬が喋るのかな？」

竜介が尋問するかのように聞いてくる。口調はやさしいんだけど、目が笑っていない。まったく身動き一つとれない状態だ。これじゃ、早く暗示にかけないと。

僕はコルーパに言われたとおり、石が手の中に入ったときの感覚を思い浮かべる。

「あなたは何も聞いていない。何も知らない」

すると、竜介は目がうつろになると、しばらくボーとしていた。僕は恐る恐る声をかける。「竜介？」すると、はっと我に返ったように目をぱちくりさせると、驚いた様子で周りをクルクルと見回した。

「あれっ？俺はどうしてここにいたんだ？」

竜介はそう言いながら階段を下りていく。そして、ドアを開けると、「お邪魔したな天馬」と言っ行ってしまった。

僕は静かに部屋に戻ると、コルーパを抱き上げた。

「いやあ、こんなにもうまくいくとは思わなかったよ！」

「ああ、分かったから降ろしてくれ」

僕はコルーパを降ろすと、今にも踊りだしそうな気持ちを抑えて座りこんだ。まだ、興奮状態だ。半信半疑でやってみたのに、まるで台本通りのようにうまくことがすんだ。こんなことがあってもいいのか。

「うまくいっただろ。俺を信じてくれればいい。必ずとは言わないけれど、ほとんどが問題なしで、通るものばかりだ」

僕は、「ああ、そうだけど……」と、あまり安心できない。まだ、野崎の一件が僕の中で居座っていて、うかうかしてられない。

「いつまでも心配してたって、埒が明かない。ここは行動を起こすべきだと思う。それは、明日の会議であり、次の会議であり、野崎さんのことでもある。だから、その前にすべきことは」

「何だ？」僕が聞くと、コルーパはにやりと笑って、「君にとって今すべきことは、とにかく寝ることさ」

そうだな。今回はコルーパの意見に賛成だ。ここは、休憩を取って次なる挑戦に挑むとしよう。僕は、深く頷いて、コルーパに部屋を出て行ってもらう。べっちに横たわり、目をつぶる。

これでいいのか？これでよかったのか？僕は宇宙外交官になつてよかったのか？僕は、いつも、余計なことはかり考えてしまう。でも、今回ばかりは余計なことは考えないようにしよう。僕は、これでいいんだ。僕は宇宙外交官だ。

宇宙外交官とコルーパの正体 ? (後書き)

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd)よりよい表現に推敲しております)を執筆中です。

初めての会議と反政府軍？

ふう。それにしても、せつかくの夏休みがコルーパのせいでもちやくちゃだ。とりあえず、今の状況を整理するでしょう。

僕はベッドに寝転がり、考える。

今日は八月五日。とてもいい天気どこかへ出かけるには最適だ。もっとも、今日の僕は外に出かける気にはならない。というか、出られないのだ。今日、僕の家で初めての会議が行われることになっているらしい。もちろん、最初からビシバシやっていくとは思っていないけれど、何だか緊張した。外交なんて、国のお偉いさんが勝手にやってくれていて、僕とはどこか違う次元での話しだと思っていたからだ。

どこことなく、感じの違う空気が漂っている。現実かなんて確かめたくもない。僕はわかっていて。コルーパが初めて喋った日、これは現実なんだと。

何とか気持ちの整理がついた僕は、ベッドの下で寝そべっているコルーパに確かめるようにして聞く。ほんとは聞きたくなかったんだけど、効いておかなくてはいけない。

「なあ、コルーパ。僕は本当に『宇宙外交官』なんだな？」

すると、コルーパは目を開けて言った。

「何を言ってるんだい？ 正真証明君は宇宙外交官だ。血液検査だっ
てしただろう？」

「そうだな。僕の血液中の遺伝子と、僕のおじいちゃんの血液中の
遺伝子が一致したんだもんな」

僕が念を押すように言うと、「ああ、まあな」とコルーパは言葉を濁すように言った。その微妙な言い方が気になったが、僕はあえて無視をした。

「それで？ 会議はいつ始まるんだ？ サイザンフ星人はどうやって来

るんだ？」

コルーパが壁にかかった時計を見上げる。

「そうだな……。今、十時半か。会議が始まるのは一時半だから三時間後だな。彼らは『地球人』になってくる。たぶん。天馬の友達のようにしてやってくるはずだ。俺は天馬の部屋　つまり、ここが安全圏だと伝えてある。この部屋にきたら元の姿に戻るだろうな。サイザンフ星人本来の姿に」

それを聞いて僕の首筋の毛が逆立った。僕の脳裏にさまざまな、宇宙人像が描かれていく。どれもこれも恐ろしいものばかりだ。

「なあに。心配することはない。サイザンフ星人の容姿は地球人とほとんど変わらない。ただ　一部のところが変わってるんだ」まだ、心配が消えない僕を見てコルーパは付け足した。「ちよつとな　まあ、いざとなったらコルーパがついている。どうにかなるだろう。　たぶん。」

「それで？この前の、『縛り』のことだけど、あれも条件なんだろ。世界が破滅するってのはサイザンフ星人が攻めてくるとか……」

僕が言うと、コルーパが驚いたような表情を一瞬見せた。

「どうしてわかったんだい？」

「さあ。宇宙外交官になるって言う時点で、縛りが条件なんだと思っただよ。サイザンフ星人と友好状態にある以上、サイザンフ星人は自分の星の技術と財産、そもそも宇宙の『真理』を守らなくてはいけない」

僕が説明すると、コルーパが固まった。

「詳しいな。どうして、そんなことを知っているんだ？」

「お前の心を読んだ」

そういうと、コルーパは、ああ……とため息をついた。

「使い方がよくわかってるな」

「好奇心って奴さ」

すると、コルーパは考え込むように下を向くと、つぶやくように言った。

「しかし、不思議なものだ。たった一日で石の力をマスターできるなんて、天馬のおじいさんでもできなかった。そうすると、やはり天馬は『彼』なんじゃ……」

僕には言ってることがさっぱりだった。

やがて、約束の時がきた。僕の緊張は頂点だ。一体何をすればいいのか。コルーパは大丈夫だと言っているけど、大丈夫じゃないよ。うな気がする。そもそも、僕は緊張に弱い。すぐに気持ちが悪くなったり、おなかが痛くなったりする。

そんなことを考えているうちに、ピンポンというドアチャイムが鳴った。そして、ずかずかと入り込んできたのは竜介だった。僕は思わず、はあ？と間抜けな声を上げた。すると、竜介は無言で2階に上がって行った。そして、僕の部屋に入った。

「おい、どうしたんだよ」

僕が竜介に聞くと、コルーパがいいんだ、と僕をたしなめた。竜介はコルーパの前に座って、「そろそろですかね？」とコルーパに聞いた。

「ええ、そうですね」

コルーパがうなずくと、竜介がズルズルという音を立てて老人に変わった。振り返るとそこには。

「あ」

初めての会議と反政府軍 ？（後書き）

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

初めての会議と反政府軍？

ズルズルという音とともに、『彼』は本来の姿を現した。肌の白い老人。振り返ると、目が青かった。目自体が、というべきか。僕が以前、二回もあつた少年。彼と同類の『人』が目の前にいた。これが、サイザンフ星人の最高指導者、バンバルジ首相との最初の出会いだった。

「どうかしましたか？」

首相が驚いている僕に尋ねてきた。「いついえ、別に」僕はしどろもどろで答えた。首相はにっこりと微笑むと、「では」と言つて懐から丸い機械を取り出した。そして、大きな赤いボタンを押すと、鋭いキー！という音とともに五人のサイザンフ星人が現れた。首相が手で示す。

「まずは面通しということで。私はサイザンフ星人最高指導者バンバルジです。彼らを紹介しましょう。サイザンフ使節団の者達です。大抵の場合、私は彼らに言伝を言い渡し、あなた、天馬さんに会いに来て私の言伝を言います。例えば、次の会議の予定日ですね。他にも、いろんな面でも彼らはあなたをサポートしてくれることでしょう」首相はここで言葉を切つた。「何か質問は？」

そう聞かれて僕は、そおつと手を上げた。

「あの……。質問とかじゃないんですけど、僕、いつペン会つてるんですよね。その、首相ではなく、サイザンフ星人に。あなた方と同じように白い肌、真っ青な目をした少年に」

「少年？」首相が覗き込むようにして聞き返してきた。「サイザンフの少年が地球に？それは、何かの間違いでは……」

「どうやら」コルーパが首相の言葉を遮つて言う。「今日は面通しだけでは、すまなさそうです」

しばらく、沈黙が流れた。なんかいけないことを言っちゃったかな？と思いつつ、僕は俯いた。ふと、顔を上げると、首相は眉間にしわを寄せている。使節団も同じように。普段なら笑っちゃうような絵を見ている感じだけど、空気の重さが違う。なんだか、爆弾のスイッチを押してしまったみたいだ。

「……ということは」首相がようやく口を開く。「やはり、『彼ら』が地球に来ていたわけですか？」

コルーパが重々しく頷く。コルーパはいつになく真剣だ。それにしても、『彼ら』って誰だ？僕がそう思っていると、首相が心を読んだように僕の方をちら、と見ると話し始めた。

「ここは、やはり言うておいたほうがいいでしょうな。『彼ら』とは、反政府軍のことです。反政府軍は我々のやり方に不満を持っています。何しろ、宇宙外交について何も知らない地球と我がサイザンフ星を除くと、そのほとんどが軍事に特化しています。地球は資源も豊富であり、生き物が住みやすい、宇宙には滅多にない軍事拠点になる星です。そして、他の星から程よい距離にあるため、交易拠点にした星は有利な状況に立つことができるわけです。友好的に外交をしているサイザンフ星に不満を持つものが出てきてもおかしくありません。しかし、我が星は民主制なのです。軍隊を持っていることは持っていますが、それでは太刀打ちができないのです。だからといって、独裁制に変えることは容易にできないでしょう。あなたがたを巻き込むことになってしまいうからです」ここで、いったん話を止めた。首相は深く息を吸うと、続けた。「反政府軍が地球を取れば、独裁政治が成立してしまう。我が星も壊滅的な打撃を受けることになります。反政府軍および、他の軍事に特化した星は、地球をずっと狙っていました。それを、守ってきたのが我々と……宇宙外交官なのです」

そういうことか……。僕の中の疑問が、ようやくつながり始めた。あの少年が地球に来たのは、いわば『下見』だった。それ以上の目的はなかった。反政府軍と軍事に特化している星は、僕たちの星を

侵略しようとしている　！

今の話聞いて、僕はようやく宇宙外交官の重大さ、今起きていることの重大さが理解できたようだ。コルーパは僕の顔を見て頷いた。勝手に心を読んだようだ。

でも、気になることがひとつあった。それは、自分の中で納得していたはずのコルーパの正体だった。彼は、宇宙人。間違っただけだ。しかし、僕が宇宙外交官だといった。反政府軍のことも知っている。なにより、サイザンフ星の最高指導者と知り合い。どういうことだ？僕はコルーパの心を読もうとしたがだめだった。がっつちりと、心の扉を閉めてしまっている。そうになると、次は首相だった。心を読もうと集中すると、首相がこちらを向いた。

「人の心を勝手にのぞいちゃだめですよ」

え？なんで分かったんだ？……よく考えてみれば、彼は宇宙人だ。もう一度首相の心に入り込もうとすると、扉を閉めてしまった。そして、口を開いた。

「これで、分かっていたただけでしょう？……と、言っても天馬さんはまだまだ知りたいことがあるようですか？」

首相は僕が言うように促した。

「ええと、いいですか？コルーパのことなんですが。彼は一体なんなんですか？」

聞き方を間違えたと思ったときには首相はクククと笑っていた。

『なんなんですか？』じゃ、物扱いだ。が、首相は気にせず答えてくれる。

「彼は副官ですよ。宇宙外交官の副官」

僕は啞然としていた。そういうことだったのか。つまりは、この間の出来事はすべて彼が仕切っていた、ということだ。なぜ、コルーパが首相のことを知っていたのか。宇宙外交官が何なのかを知っているのかが分かった。

「それで？」僕は首相に聞いた。「反政府軍に対して僕たちは今何

をすればいいんです？」

「条約を練り直すか、侵略に備えるか。しかし、天馬さんは奴に一度会っていると、コルーパから事前報告を受けています」

「奴？」 僕は真っ先に聞いた。

「天馬さんが二度会ったという、サイザンフの少年です。いや、少年ではないのですが……」 僕は首相の言い方が気になった。「今、妙な動きをすれば真っ先に狙われるのは天馬さんです。彼らの居場所が分かった今、うかつに動くことはできなくなっただけです」

それを聞いたとき、少し風が吹いて、ちりんと鳴った。それが合図のように、僕は急に汗が噴き出てきた。どうやら、驚きの連続で今が夏だということを忘れてしまっていたようだ。僕はそばにあったタオルで汗を拭くと、聞いた。

「少年ではないって、どういうことなんですか？」

首相は横にいた使節団の人たちと、ひそひそはなし、コルーパと目を合わせると、軽く頷き、僕の質問に答えた。

「奴は、サイザンフ星人の中でも特別な存在でして、将来有望なサイザンフ星人でした。奴は姿を変えることができます。何にでも。犬でも、猫でも、人間にも。今、この使節団の中にもいるかもしれない。誰も信用できない状態なのです」

「あなた達は 信用に値する人物であるか？」

「そう思っていただければ結構です。しかし、奴らがこの地球に来ているということを念頭においておかないと、いつ、どんな攻撃を仕掛けて来るのか、細心の注意を払わなくては」

初めての会議と反政府軍 ？（後書き）

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

初めての会議と反政府軍？

彼らが帰ったのは3時きっかりだった。帰るときに彼らは涼しそうな顔で言っていた。

「それにしても、地球は涼しいですね。しばらく滞在することになります」

僕は以外だった。こんなに暑いのに。そういえば、会議中も彼らは汗をかいていなかった。でも、地球より暑いサイザンフ星って……。冷や汗を流している僕の横で、コルーパが哀れみの意を込めたため息をついた。

「何でもかんでも地球と同じにはいけないよ。それぞれの惑星では気候や構造からなにもまで違うんだ。その点では地球は恵まれていると言っているね」

「殴つてやろうか？」僕が睨みつけると、シユンと小さくなる。

しかし、僕たちの星が侵略されようとしてるのに、こんなにまったりとじていていいのだろうか？なんだか心配になってきた。思い切つて、そのことをコルーパにぶつけてみると、「彼らも信用できない人物だからさ」と、言った。

「どういうことだ？」僕は問い詰めた。

すると、コルーパはため息混じりに話し始めた。

「彼らが、反乱軍のことを話し始める前には、もうすでに情報はつかんでいた。しかし、今頃になって言うなんて、おかしいと思わないかい？彼らは彼らの手で、反乱軍をおさえてきたんだ。何故、それを隠すのか検討もつかないけど。けど、こうは思わないかい？彼らも、この地球を狙ってる」

そんな馬鹿な、と笑い飛ばそうと思ったけど、コルーパはまじめだった。

「……何の根拠があつて？」僕が聞くと、よくぞ聞いてくれましたとでも言うように、うなずいて続けた。

「どつやら、彼らは地球を貿易国として反映させたいらしいな。予定として、地球資源の秘密裏の貿易を要求してきている。それに、彼らは軍事拠点にはしたくないらしい。わかるか？反乱軍にとられる前に、とつちまえていうことなのさ」

「じゃあ、彼らを信用してはいけないということか？」

「いや、その件については別だ。地球を侵略する気はないと思うけど、影で操りたいだけなのさ。いいかい、宇宙じゃ誰も信用できない。なれなれしく近寄ってきて、腹の中じゃ自分の利益だけしか考えてない。そういう世界だ。安直に信用することはまずない。けれど、彼らは重要な外向星の一つだ。彼らだつて、自分の利益も考えている。でも、この地球を手中に収めるには俺たちのことを信用させなくてはいけない。だから、彼らも嘘をつけない。でも、全てを信用してはいけないんだ。僕らは僕らの利益を考えなくてはいけないからね」

要するに、あまり信用するなつてことだろ！つていいいなくなつたけど、黙っておいた。ここで何か言えば、睨まれる。でも、一つ聞きたいことがあった。

「姿を変えられるという少年についてだけど、その奴はなんなんだ？……その、つまり首相も姿を変えられるし、少年の何が特別なんだ？」

コルーパはきよとんとしていたが、ああ、とつばやいた。

「奴は最終兵器なんだ」

へ？とまつたく意味のつかめない僕の表情を楽しむようにして続けた。

「姿を変えられるサイザンフ星人はごく一部。地球でいう、英才教育みたいなものを受けたサイザンフ星人のなかで、才能をもつたサイザンフ星人だけが姿を変えられるようになる。でも、奴の場合はもつと特別だ。サイザンフ星が侵略、または地球が侵略されたときに動く、最終兵器だ。でも、今は反政府軍によって、地球、またはサイザンフ星を侵略するようになっている」

「それは、一度も侵略として動いたことがないのか？」

「あるな」コルーパはまじめな顔で答えた。「氷河期あたりがそうだな。反政府軍は二度現れた。今回と、氷河期あたりで。そのときも、宇宙じゃものすごく大きな問題になったんだ。地球を野放しにしておくわけにはいかないってな。反政府軍が現れ、最終兵器で地球を滅ぼそうとしたんだ。サイザンフ星が地球を影で操っていた時代だからね。地球を滅ぼして、サイザンフ星を軍事国家にさせようとしたんだ。地球あつての民主制だからね」

つまり、奴に狙われると僕も終わりってことか。僕には石の力があるけど、地球を滅ぼせるほどの力を持っている最終兵器には太刀打ちできない。僕　宇宙外交官がやられてしまうと、サイザンフ星の立場がなくなる。反政府軍の思惑通りということか。

ますます、まずいな。なんだか、緊張してきた。

でも、もつと緊張したのは十日後だった。

十日間、特に反政府軍の大きな動きもなく、平穏な日々が続いていた。僕も、宇宙外交官の仕事をまっとうしていた。おじいちゃんに会いに行きたかったけど、そんな暇はない。だって、宇宙外交官って、すごく忙しい！

本物の政治家みたいに、分刻みや秒刻みって訳じゃないけど、気楽にゲームしてる時間や、ましてや、外に出かける余裕なんてものは微塵もなかった。

僕が数々の条約、規約の書類と格闘しているとき、突然、首相が訪問してきた。

「しばらく京都にいました」

どすると、大きなお土産の袋を置いたと思ったら、意外な発言をした。てつきり、東京とか、ニューヨークとかにいますってた。

「東京やニューヨークなんかは古い時代のもので、どれも見劣りするんですよ。でも、エジプトのピラミッドやマヤ文明の建物なんかは、我々の科学が使われていて、ワクワクしますね」

「じゃあ、京都のどこがいいんでしょう？」僕が聞くと、

「京都は宇宙の中でも人気のある観光スポットでしてね。私たちが行ったときも、たくさん宇宙人がいました」そのあと、首相は声を低くして続けた。「しかし、妙ですね。ここのところ、反政府軍の動きも見かけられません。この大事なときにおとなしくしているのもおかしいでしょう?」

「ええ、まあ。でも、平和にこしたことはありませんが……」

僕は言った。そう、戦争なんてまっぴらだ。それに、何事もないままこの夏を過ごしたい。

そう思っていたら、コルーパが言った。

「それは、つまり……。『あれ』ですか」

「そういうことです」

え? 『あれ』ってなんなんだ?

初めての会議と反政府軍 ？（後書き）

読んでいただいております。

徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd（よりよい表現に推敲しております）を執筆中です。

宇宙大戦争 ?

そのとき、ちょうど電話が鳴った。竜介からだった。

「おい、天馬テレビつける！」

ものすごい大きな声だった。思わず、受話器から耳を離してしまっただけ、そのままテレビをつけた。

どこから来たのか地獄の門。

そう、タイトルがつけられたニュースがやっていた。ちょうど、このあたりだった。巨大な穴が空いていた。一キロ、二キロなんてレベルじゃなかった。周りが焼け焦げていた。

「天馬？聞いてるか？」

竜介の声が遠くで聞こえる。

僕は電話を切った。これは……。

「来たか」コルーパの声だ。

「そのようです」

振り返ると、テレビの前に全員勢揃いしていた。

「宇宙外交官は俺たちの最終兵器だ。地球を巡る、宇宙戦争に終止符を打つんだ。すなわち、地球が宇宙の政治に加わる。そうすれば、混乱を避けることが出来るんだ」

コルーパが僕を見据えていった。

「この戦争に勝てるのか？」僕が聞くと、コルーパはうなずいた。

「勝てる。それに、おまえ一人じゃない」

「どうということだろう？」

そのとき、ドアチャイムが鳴った。こんなときに、誰だろう？

と思いつながら、そつと開けると、おじいちゃんがいた。その隣には、たくさんの人が。誰だろう。

「久しぶりだね、天馬。でも、ゆっくりお茶を飲む余裕なんてない。

まずは彼にふれてくれ」おじいちゃんが矢継ぎ早に言う。

彼って誰だと思つてると、すつと、見知らぬ男の人が出てきた。

「彼は他の人の能力をコピーできる。新しい、宇宙外交官の力をコピーさせてやっておくれ。これで、我々は勝てる」

超能力者？ コルーパが言っていたことはこのことか。周りにいる人たちも超能力者だろう。しかし、勝てるのか……。

とりあえず、僕は男の人に触る。すると、僕の体が青色に光る。どンドン、熱くなつていく。なんだか、力が抜けたと思つたとき、光は消えた。

「コピーできたようだね」おじいちゃんが言う。「この前、コルーパが来たときにはビックリしたよ。まさか、この日が来るとはね。準備は万全だ」

僕はうなずく。

「首相、サイザンフ星に応援を呼ぶことは？」

少し、不安になりながらも聞いてみる。

「無理ですね。半年かかりますから。だから、コルーパが天夢さんに頼んでおいたんですよ。これでやるしかありません」

そうか……。この前、『宇宙戦争』という映画を見たけど、実際どうなんだろう？

「そんなことを考えている余裕はないだろ？」コルーパが言う。

僕の心を読んだか……。

僕は、目の前にいる人たちをみる。皆、決意は同じのようだ。僕も覚悟を決めた。

「さあ、行こうか」

宇宙大戦争 ? (後書き)

読んでいただいております。
徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd (よりよい表現に推敲しております) を執筆中です。

宇宙大戦争？

僕は飛び立った。言葉通りだ。僕たちは空を飛んでいる。横を見ると、さっきの人がいた。そうか、だから僕の力をコピーしたんだな、といまさら気づいた。

下を見ると、ものすごい速さで走っている人がいる。他の人たちは、首相の船に乗っている。想像していたUFOとは違っていただけ、ものすごく大きい。一般人にみられるんじゃないかと思うと、ひやひやするけど、もう、見られたって、どうってことない。

やがて、巨大な穴のところに着いた。まだ、シュウ……、と音を立てている。

「奴らはこのために地球に来ていた」唐突にコルーパが言った。「反政府軍は兵器を隠すために来ていたんだ。ここに、兵器がある」僕は驚く。奴らは、本気で攻めてくるんだな。

そのとき、ブーン……、という音がしたかと思うと、穴から何か飛び出た。そして、空高く、飛び上がった。

何かが落ちてきたと思ったら、巨大な機械だった。出てきた穴よりも大きかった。巨大な円盤形をしていて、地上に這うように進んでいく。

「あれは彼らに任せておけ。天馬には仕事がある」コルーパが言った。隣にいた、男の人が空を指す。巨大な円盤がこっちに向かってくる。

「あの艦隊を頼んだよ。俺は最終兵器とやらを倒しに行く」
そういうと、男の人は飛んでいった。

日が陰ったなと思うと、さっき見たのより、ずっと大きな円盤が来ていた。扉のようなものが開いたと思ったら、そこから小さな円盤が大量に出てきた。

地上では、円盤形の兵器がズーン、ズーンと音を立てながら、あたりを破壊していく。状況をじっくりと観察している余裕はない。

僕は艦隊に向かって速度を上げた。

まるでゲームのようだった。魔法の弾や、手から出る、黄色いビームはないけど、それでも十分だった。僕の手は、ダイヤモンドよりも硬い。その証拠に、UFOに手で切るように腕を振ると、まるでチーズのように裂けていく。

しかし、相手だって、ものすごい数で襲いかかってくる。これは、気が抜けないな。と、思った矢先、何機か固まって突進してきた。だいぶ前に、僕が熱中したSF映画のように、赤色の弾を打ってくる。避けられない、と思ったとき、僕の胸に弾が当たった。ものすごい衝撃が駆け巡る。何か熱いものを押し当てられたかのように痛みが襲う。

僕はそのまま、落下していった。一気に力が抜けて、ヒュウウと音を立てながら落ちていく。何機ものUFOが、追い打ちをかけようと、撃ちながら急降下してくる。その弾を何発も体で受けながら、ビルに真上から突っ込んでいった。

しかし、気分はいい。スーパーマンってこんな気分だろうか。アニメとかで落下のシーンがあるけど。うん、僕はかっこいい。

ガラガラとビルが崩れる。僕はがれきをよけると、よいしょと立ち上がった。指をポキポキと鳴らして、上を見上げた。UFOがビルの真上でホバリングしていた。

僕は足に力を入れると、思い切り飛んだ。そのまま、回転しながら、機体に穴を空けてやった。素早く、機体の破片をつかんで、周りにいたUFOに向けて投げた。破片は、僕の石の力で、鋭くとがっていき、全ての機体に穴を開けた。

残るは、空母だった。僕はその周りをうろついたら、空母に触って、石の力を使った。最初からこうすればよかったのだろうか、空母は崩れ落ちた。

僕はそのまま、「兵器」に向かって、飛んだ。

「兵器」は無数の触手を伸ばして、あたりを破壊しながらゆつくりと進んでいた。「兵器」は触手をビルなどに向かって振り回したりしている。僕は触手を避けながら、「兵器」に向かっていった。

「兵器」は生き物だった。近づいたら分かった。僕はてつきり機械かと思っていたけど、操縦席なんかないし、目がある。それに臭い口まである。これは生き物だ。

近づいてみていたら、目がギョロリと僕の方を見た。その次の瞬間、口元が赤く光ったかと思うと、赤い光が口から飛び出た。一瞬の出来事だった。僕はそれを避けることが出来なかった。光をまともに受けて、僕は吹っ飛んでいった。ビルを突き抜け、アスファルトの道路に打ち付けられた。

すると、足の速い超能力者のおばさんが、瞬時に僕の方へ駆け寄ってきた。

「大丈夫かい？」

「ええ、まあ何とか」

僕はかろうじて返事をして体を起こした。それを見ると、おばさんはにっこりと笑って、「兵器」の方へ走っていった。僕がふうと一息ついていると、遠くの方から叫び声に似た声が聞こえた。

「アアアアア！」

何事かと思つて、飛んで見てみると、遠くで大爆発が起きていた。そして、爆風が広がって、こっちにまで来た。僕はとっさに超能力者の人たちの元に素早く移動し、石の力を使って超能力者の人たちの周りにシールドを張った。その直後、ものすごい爆風が襲った。僕は耳をふさいで目をつぶった。しばらくすると、爆風は消えていた。が、何も見えなかった。

周りが真っ白だった。

宇宙大戦争 ? (後書き)

読んでいただいております。
徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd (よりよい表現に推敲しております) を執筆中です。

宇宙大戦争 ?

何が起こったんだろう。まったく状況が読めなかった。とりあえず、全員いるか確認する。ふう。みんな無事のようだ。

瞬時、ブーンという音が鳴ったかと思うと、黒い触手が目の前に突然現れ、僕をたたきつぶした。さすがにこれは痛かった。石の力を使って触手を燃やすと、僕は膝をついて咳き込んだ。

僕はゆっくりと立ち上がると、周りを見た。やっぱり、真っ白い霧に包まれていた。でも、音はする。ブーンという音の方向へ飛んだ。音が大きくなると、霧の中から触手がいくつも現れた。が、攻撃を仕掛けてくることはなかった。

よく見ると、胴体がポロポロと乾いた泥のように落ちていつている。そして、ついには消えてしまった。僕は地上に降りると、兵器がいたところを見た。そこには男の人がいた。男の人は僕の姿を確認すると、叫んだ。

「伏せる！」

その瞬間、背中がゾワリと逆立った。何か来る！

咄嗟に伏せると、巨大な腕が頭の上すれすれを通り過ぎた。

「早く逃げろ！」男の人がまた叫んだ。

前を見ると、真っ白な男の子が立っていた。その男の子は、ゆっくりと目を開けた。「それ」を見て、僕の体はビクンと反応した。

目が青かった。

「最終兵器」は僕を睨むと右手を前に出した。何だ、と思っていたら、体の表面にもすごい衝撃を受けて僕は吹っ飛んだ。道路に転がると、目の前には最終兵器がいた。恐ろしい速さだった。最終兵器は僕の胸ぐらを掴むと思いい切りアスファルトにたたきつけた。

「ぐはっ」という声が僕の口から漏れる。そして、たたきつけられて、宙に浮いた僕は最終兵器に蹴られ、鉄筋などがむき出しになっ

ているビルに突っ込んだ。

意識がもうろうとしている中、男の人が来て、悔しそうに言った。「奴め、兵器を食べやがった！」

僕は、はっとした。兵器が崩れていったのはそういうことだったのか。

「俺は奴を倒す。援護してくれ」男の人が言った。そして、最終兵器に向かって走っていった。僕はそれをただ見ていた。体がぐったりとしていて動かなかった。

最終兵器にやられ放題になっている男の人を見て、僕は全身に力を入れて立ち上がろうとした。が、強烈な痛みが僕を襲った。その大元は右脇腹だった。見ると、爆発で鋭くなつた鉄筋が刺さっていた。

僕は刺さっている鉄筋を石の力で粉々にし、傷口をふさいだ。見てるよ……。

鉄筋を引き抜くと、僕は最終兵器に向かって飛んだ。そして、上空から最終兵器の頭をめがけて鉄筋を思いっきり振り下ろした。が、最終兵器は微動だせず、ただ、足下のアスファルトがくぼんだだけだった。

最終兵器は鉄筋を掴むと、僕を空中へ放り投げた。石の力を使って飛ぶことが出来ずに空中へ投げ出された。そして、空中では最終兵器が待ち構えていて、赤く光っていた。僕は止まることが出来ずに最終兵器に激突した。その次の瞬間、最終兵器は大爆発を起こした。僕は、爆発に飲まれ、地上へ落ちていった。

そのまま地面に激突し、天を仰いだ。ぼんやりとしている視界の奥に、最終兵器の姿をとらえた。最終兵器は手を巨大化させ、僕めがけて飛んできていた。逃げなきゃ。でも、体が動かない。そして、僕はたたきつぶされた。僕は意識を失った。

僕は真っ白い空間の中にいた。そこには白い青い人影が2つ。僕を待ち構えていたかのように立っていた。僕が近づくと、右側の人

影が右手を前に出した。

『僕は継続する者。宇宙戦争を続けて宇宙の覇者になる者』

そして、左側の人影が左手を出した。

『僕は終わらせる者。宇宙戦争を終わらせ、混乱を沈める者』

これがどういことなのか僕は理解していた。コルーパの声がよみがえる。『宇宙外交官は俺たちの最終兵器だ。地球を巡る、宇宙戦争に終止符を打つんだ』そして、僕がなんなのか、どういう運命に立たされているのか唐突に理解した。

僕は、左の人影の左手を掴んだ。

「僕は終わらせる者だ」

すると、人影が笑ったような気がした。

「いい選択だ」

僕は目を開けた。そして、最終兵器を見る。最終兵器はぼろ布のようになっていた男の人を捨てるように投げた。そして、僕を睨みつけた。

僕は拳を固め、最終兵器に殴りかかった。でも、最終兵器の周りには見えない何かが邪魔して、手は届かなかった。僕は、その何かにはじかれるようにして後ろへ仰け反った。でも、ここで諦めるわけにはいかない。僕は何かに触ると石の力を使って何かを崩した。そして、もう一度拳を固めると思いつき殴った。

パカン！という音が霧に包まれた町に響いた。

後ずさりをした最終兵器に向かって、跳び蹴りをした。そして、石の力を使って、アスファルトで巨大なハンマーを作ると、最終兵器をたたきつぶした。ハンマーは割れたけど、最終兵器はよろけた。そして、きていた子供服を掴むと、思いつき投げ飛ばした。最終兵器はビルに突っ込んでいった。ビルはガラガラと音を立てて崩れ、モクモクと砂煙を上げた。僕はそれを見ていると、砂煙の中からコンクリートの塊が何個も飛んできた。僕はそれを走りながらよけ、正面に飛んできた塊をキャッチすると、ジャンプして、最終兵器め

がけて投げた。塊は最終兵器の頭に直撃し、最終兵器はフラフラとよろけた。僕は空中から最終兵器に向かって飛んだ。そして、足で踏みつぶした。

すると、足の裏がもぞもぞとし始め、僕は最終兵器に足を捕まれた。そして、アスファルトにたたきつけられた。でも、僕は両手をついて、たたきつけられるのを阻止し、足を回転させて、逆に最終兵器をアスファルトにたたきつけた。

僕はもう一度拳を固め、殴った。すると、最終兵器は僕を睨みつけ、ものすごい形相で叫んだ。

「アアアアア！」

僕は空中へ飛ばされ、地面はボコボコに崩れ、えぐり取られるかのように、へこんだ。

空中で僕は止まると、えぐりとられた地面をまじまじと見つめた。半径三百メートルほどは削り取られている。その中央に青く光っている最終兵器がいた。

僕は最終兵器めがけて飛んだ。そして、最終兵器から二、三メートルは離れた位置に着地した。しばらくのにらみ合いが続いた。先に動いたのは最終兵器だった。全身青く光らせて僕につかみかかってきた。僕は石の力を使って、バリアを張ろうとすると、右手が青く光った。そして、最終兵器がふれた瞬間、ものすごい光があたりを包んだ。

宇宙大戦争 ? (後書き)

読んでいただいております。
徐々に続きを載せていきます。

現在、2nd (よりよい表現に推敲しております) を執筆中です。

宇宙大戦争 ?

コルーパはえぐりとられた町の真ん中で天夢と話していた。そこはちょうど先ほど天馬と最終兵器が相對していたところだった。そこには焦げた後があるが、誰もいなかった。

「天馬はコルーパが想像していた通りの人物だったようだね」

「ああ。血液検査では天夢との接点が無かった。つまり、天馬は終わらせる者だったんだ」

コルーパが淡々と語る。

「そうでしたか。でも、娘が産んだのは確かに天馬だった」

「いや、天馬は確かに天夢の娘から生まれた。だが、その奥底は違う。いわば、初代宇宙外交官が憑依していたようなものなんだ。血液検査の結果、初代宇宙外交官の血液と一致した。つまり、天馬は宇宙人に取り憑かれていたんだ。だから、その能力を最大限に発揮することが出来た。そして、俺たちの最終兵器になった」

「それが終わらせる者の証と言うことか」天夢がゆっくりと言った。

「ああ」コルーパはこくりとうなずいた。「天馬にはもう、何をすべきか分かっているだろう。そして、自分がなんなのか、どういう運命に立たされているかも」

一人と一匹はこくりとうなずいた。

宇宙大戦争 ? (後書き)

さて、そろそろ筆を置くときが来たようです。

といっても、ペンで書いてるわけではないのですがw

この回はすんごくすごく短いので、今日中にエピソードを載せま
す。

エピソード

僕は真っ白い空間の中に放り出された。青い人影がいたところだ。でも、ここには何も無い。ただの空間でしかなかった。

僕はここにいる。いるというだけ。存在はしない。でも、いる。終わらせる者としての義務を果たすためにいる。僕は青く光り続ける右手を見る。すると、そこから声が聞こえた。コルーパーの声だ。「今、俺は首相にリンクしてもらっている。だから、こうして話せるわけだ。手早く言う。天馬はもう何をすべきか分かっているはず。お前は終わらせる者だ。家族のことは心配しなくていい。天馬の存在は、天馬と関わった全ての人の頭の中から消える。しかし、天夢と俺の中からは消えない。が、お前は存在が消える」

ああ、わかってるよ。僕もわかってたんだ。

「ああ、だから終わらせる者になったんだ」
「その辺はその人物にしか分からない。俺に言われてもしょうがないさ」くっくくという笑いが石の向こうから聞こえた。

「コルーパー、お前宇宙外交官と別れるとき、寂しくないか？」期待を込めて聞いてみる。

「天馬なら分かるはずだ」笑いをこらえるようにコルーパーが言った。「それじゃあな、宇宙外交官」

僕は、おうと返してリンクを切った。僕にはもう残すものなんて無い。あ、まだクリアしてないゲームが……。でも、これでいいんだ。

僕は宇宙外交官だ。

さて、宇宙外交官の最後の仕事だ。

僕は石の力を使った。石は今までに無い輝きを放ち、僕を包んだ。

町は復興され、G8は宇宙政治に加わることになった。戦争で死

んだ人は全員生き返った。だが、みなこのことを忘れてはいなかった。自分たちがどのような状況に置かれているのか把握し、お互いがお互いを助け、そして生きながらえる方法を見いだした。宇宙でも軍事国家は消滅し、銀河は民主制へと移行へなった。

封印された儀式の間には一つの石碑が置かれていた。そこにはこう刻まれている。

『この世で一番の偉人、宇宙外交官。そして終わらせる者。空野天馬』

そして、その横には犬が一匹、主人の帰りを待ち続けるかのよう
に座っていた。

エピソード（後書き）

完結です。

いままで読んでくれた人、ありがとうございました。

現在2ndを執筆中です。

こんなにあっさり終わったのは2ndがあるからなんだ！という言い訳は通用しないですね。

まだ、文章表現が豊かとは言えません。ほど遠いです。

2ndを書いているのも、なんじゃこりゃってというのがたくさんあります。

でも、

たくさん書いていいものを書けるようになっていきたいです。

ブログの方には2ndを徐々に載せていっているのですが、是非そちらも覗いてください。

キーワードは「喋る犬と宇宙外交官」でw

ではまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008t/>

喋る犬と宇宙外交官

2011年6月2日18時10分発行